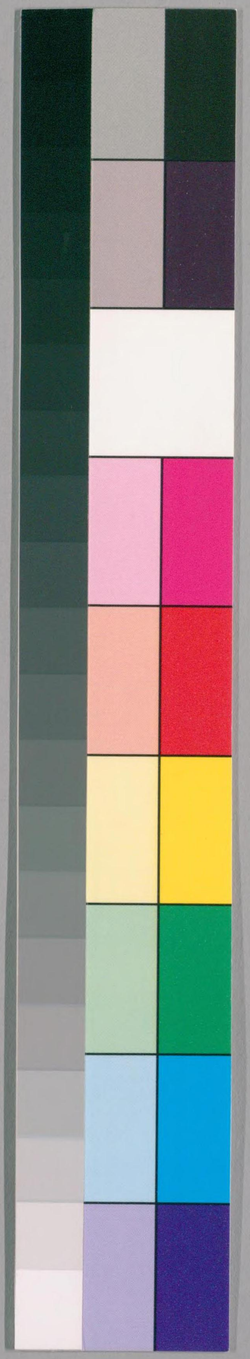
江戸名所図會

三

839
20
57



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57

ガラス使用

三縁山増上寺　廣度院と號關東淨家の總本寺十八檀林の冠首にして盛大の佛域なり百一代後小松院の御願にして開山ハ大蓮社酉誉上人中興ハ普光觀智國師なり

十八檀林ハ武總常野等に存在せ阿弥陀佛六八本願の中第十八を以て最勝とするに因ゝ

能鳴鏑におかされせ又君子の操ありて御當家御称号松平氏の松や千歳を閲歴し木公に從ふ細にわかつときハ十八公なり太夫の封を受く其字やまひ精舍十八區を建て永く栴檀林とし多く英才を育して法運無窮の謀を設けたまひ御子孫永く安からんるハ霜雪の後松樹獨栄茂するめくとの盛慮に從ひ源家の御代を淨家の白旗流義により千代万代までも守護しなるへきそを表しまふなりとそ以上淨宗護國篇新著聞集等の意を採摘せ

本堂本尊阿彌陀如来　惠心僧都の作にして座像御長四尺

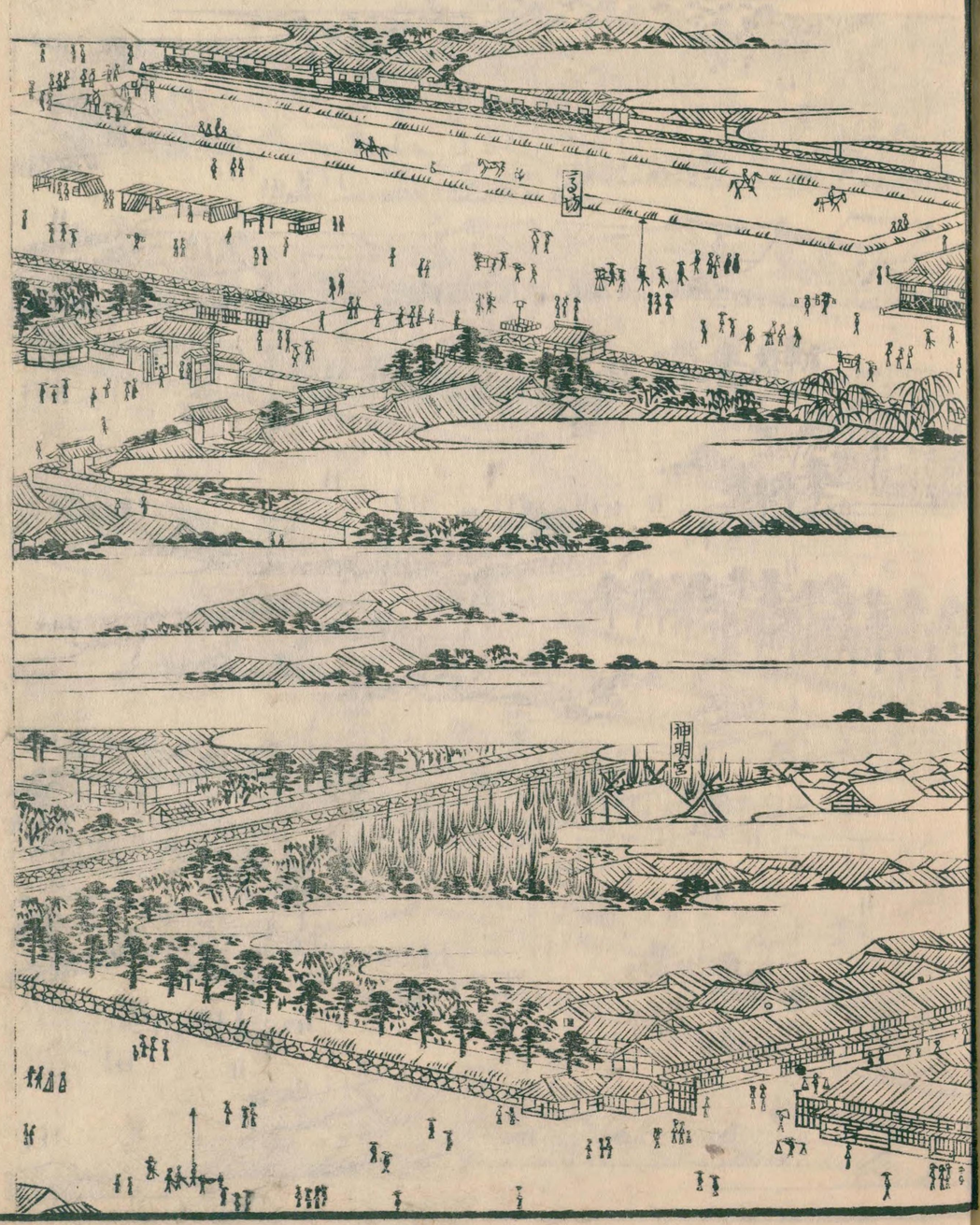
額　三縁山　廓山上人真蹟　上人ハ當寺第十三世なり甲州の産にして高坂彈正の子なり

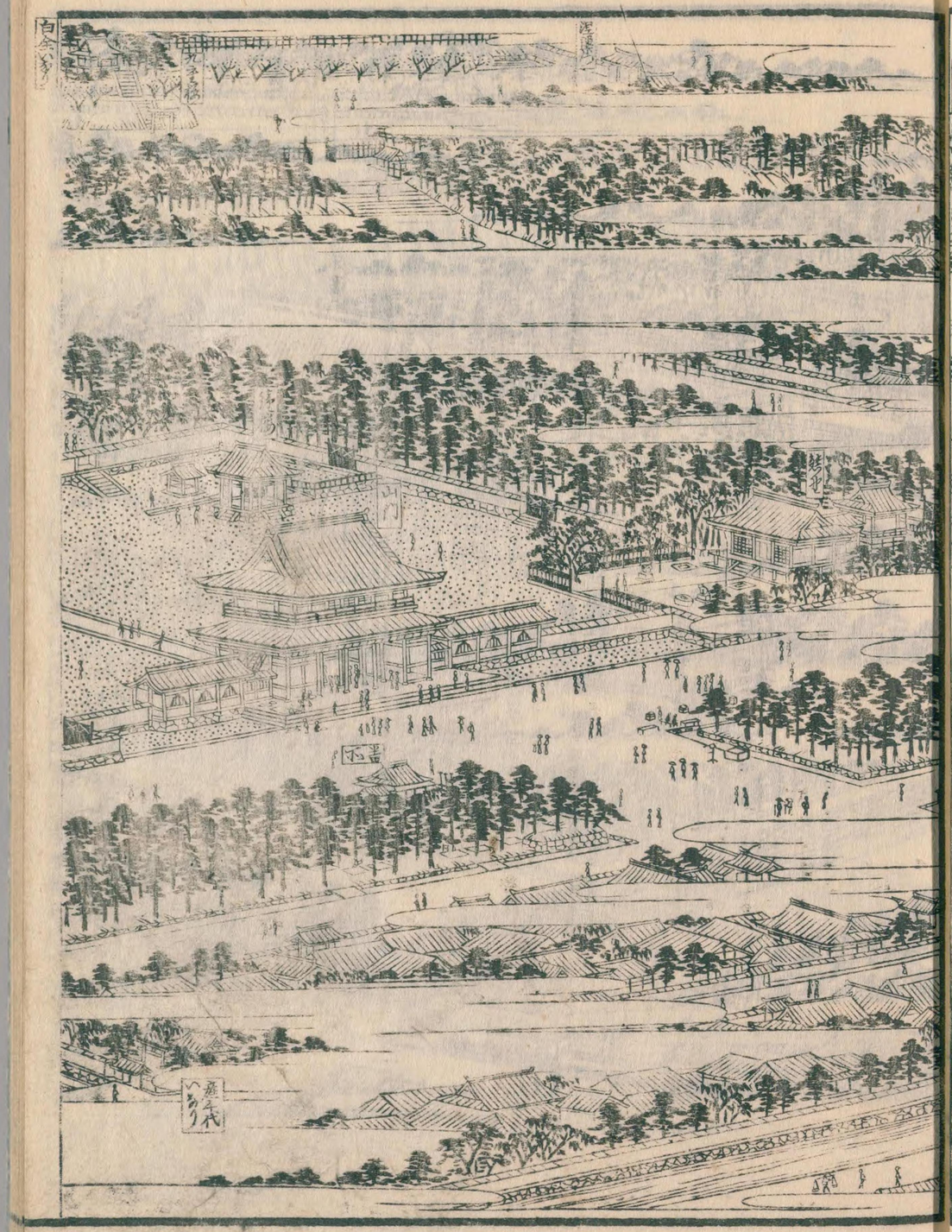
御經藏　本堂の前左の方辨の中にあり或人云ゝに納る所の一代藏経ハ宋板にして其先豆州修善寺にありて平政子の寄附なりとそ後彦坂九兵衛尉　台命を奉し當山にうつしをとなり菊岡沾涼云昔ハ方丈にありしを覧永九年照誉上人了学大和尚経藏を創立しうるとなり今ハ官造に列せ

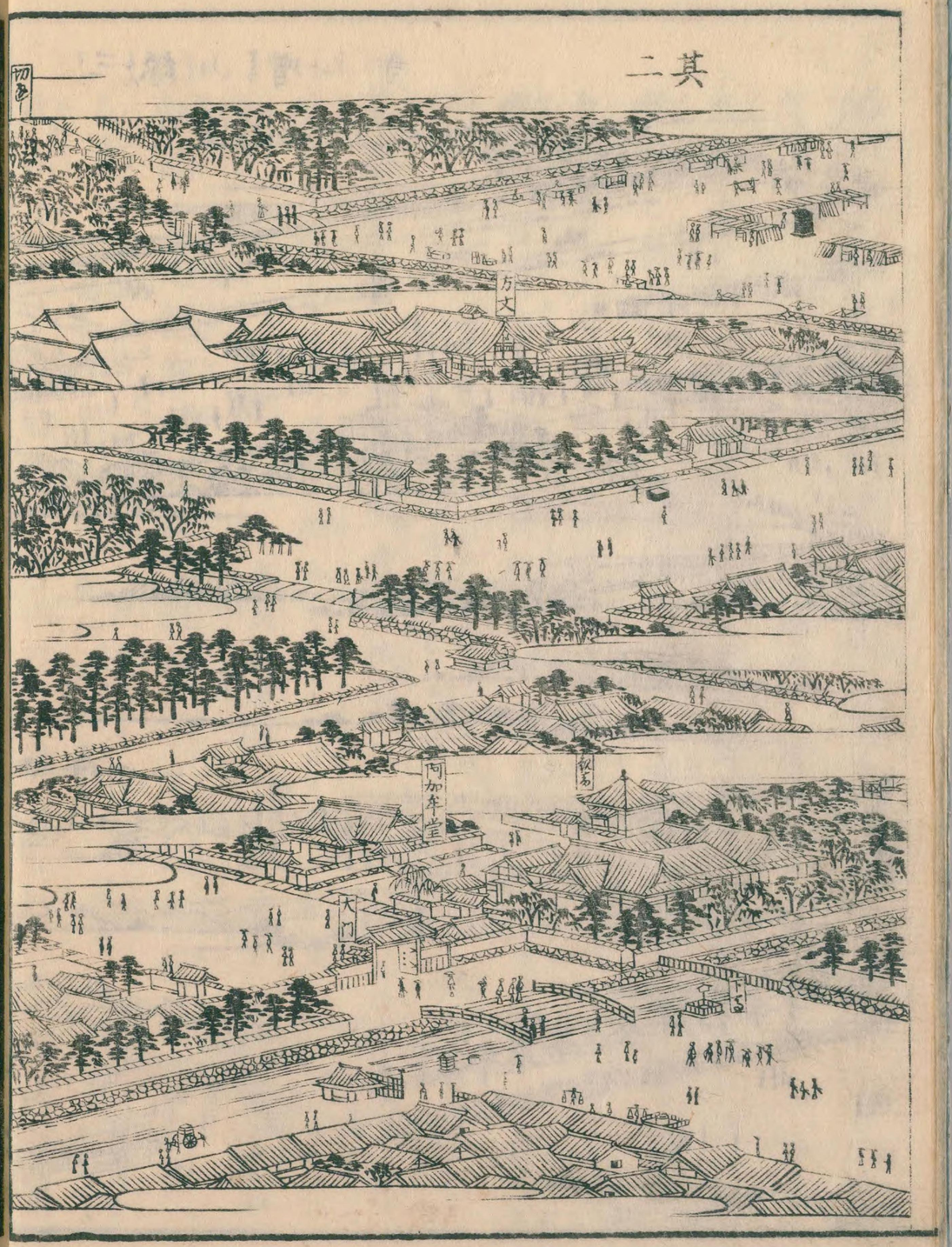
開山堂　同所左になりて當寺開山以下累世大僧正の遺像および靈牌等を置きたり

根岸信輔氏寄贈
富山文庫
国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

開山酉誉上人諱ハ聖聰大蓮社と号ハ鎮西正統第八世の祖とす貞治五年七月十日千葉系圖貞治二年六月三日とあり北總の千葉に生る父ハ千葉陸奥守氏胤母ハ新田氏なり童名を德壽丸と云一書に德千代とあり加冠して胤明と称す出離の志深く釋典を慕ふ九歳にして遂に同國千葉寺に入て落飾し初て密教を学ひ後岡公に投帰して淨宗に入智道倍熾なり其後武州豊島郡江戸貝塚の光明寺に住せらる今の増上寺是なり江戸名勝志に云増上寺の旧地ハ糀町一丁目越後やしきと云辺なりとあり此寺始ハ真言瑜伽の道場なりしが竟に光明寺を改て三縁山増上寺と号し宗風をも轉して淨業の精舍とす永享十二年庚申七月十八日寂ハ歳七十五臘六十七東國高僧傳に應永二十四年に寂す壽詳なりとあり中興開山勅賜普光觀智國師諱ハ存應字ハ慈昌貞蓮社源誉上人と号せ平山左傍門尉季重の後裔なり傳燈系図に云姓ハ由木又ハ金吾校尉源利重云々天文十三年護國篇十年に作る武州由木に生る始衣を片山の宝臺寺に樞ひ十八歳感誉



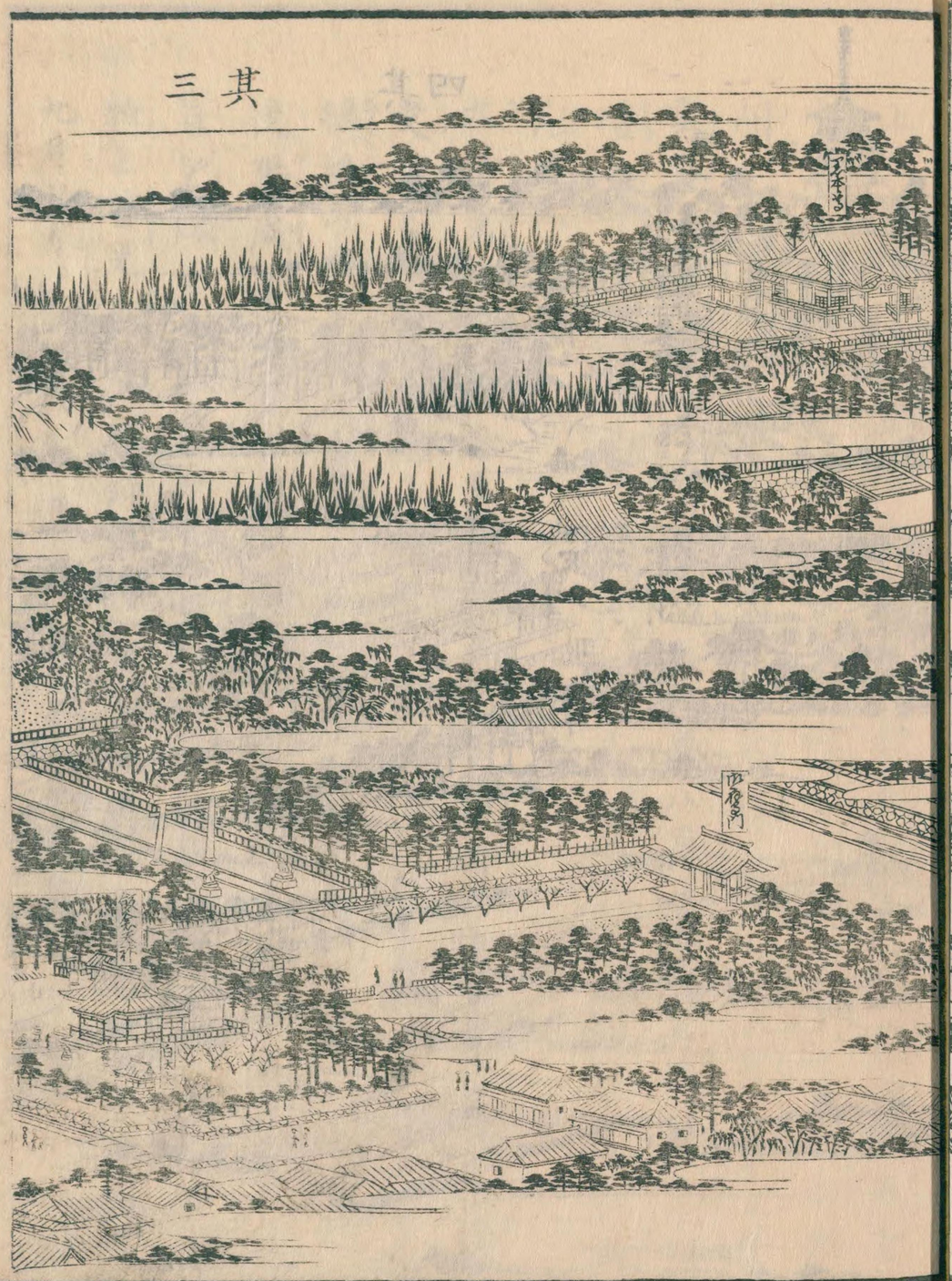


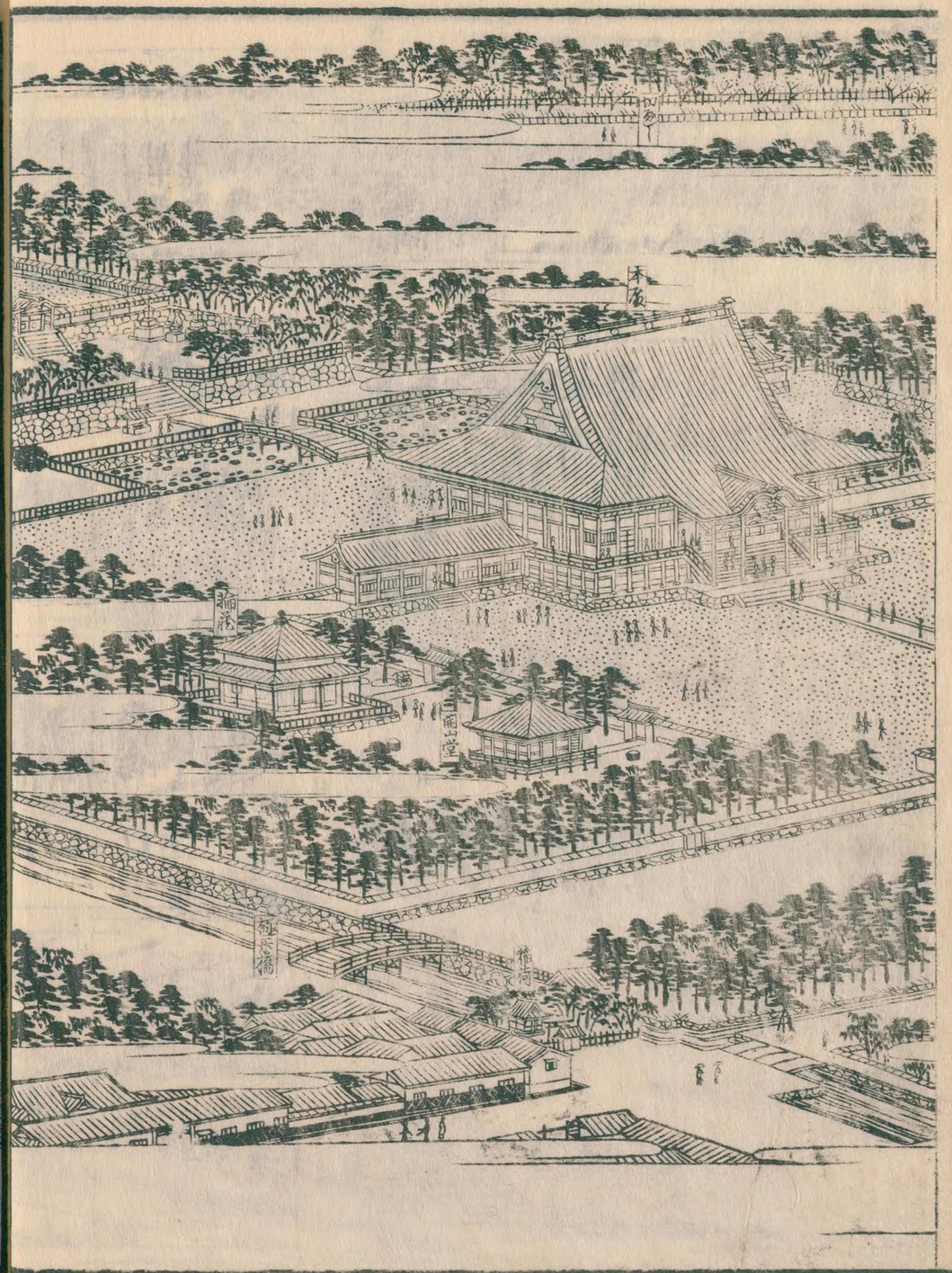


国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57

ガラス使用

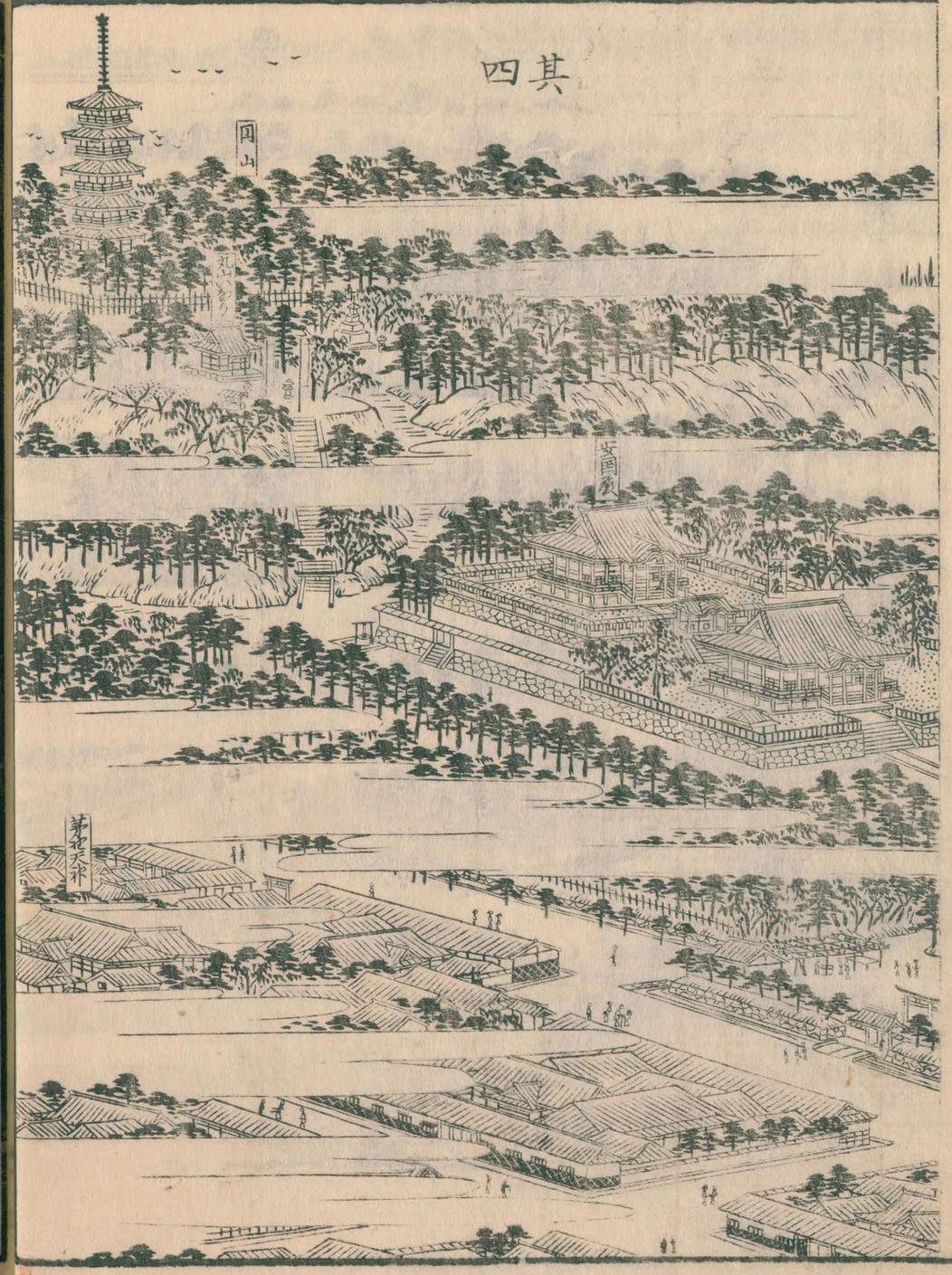
其三



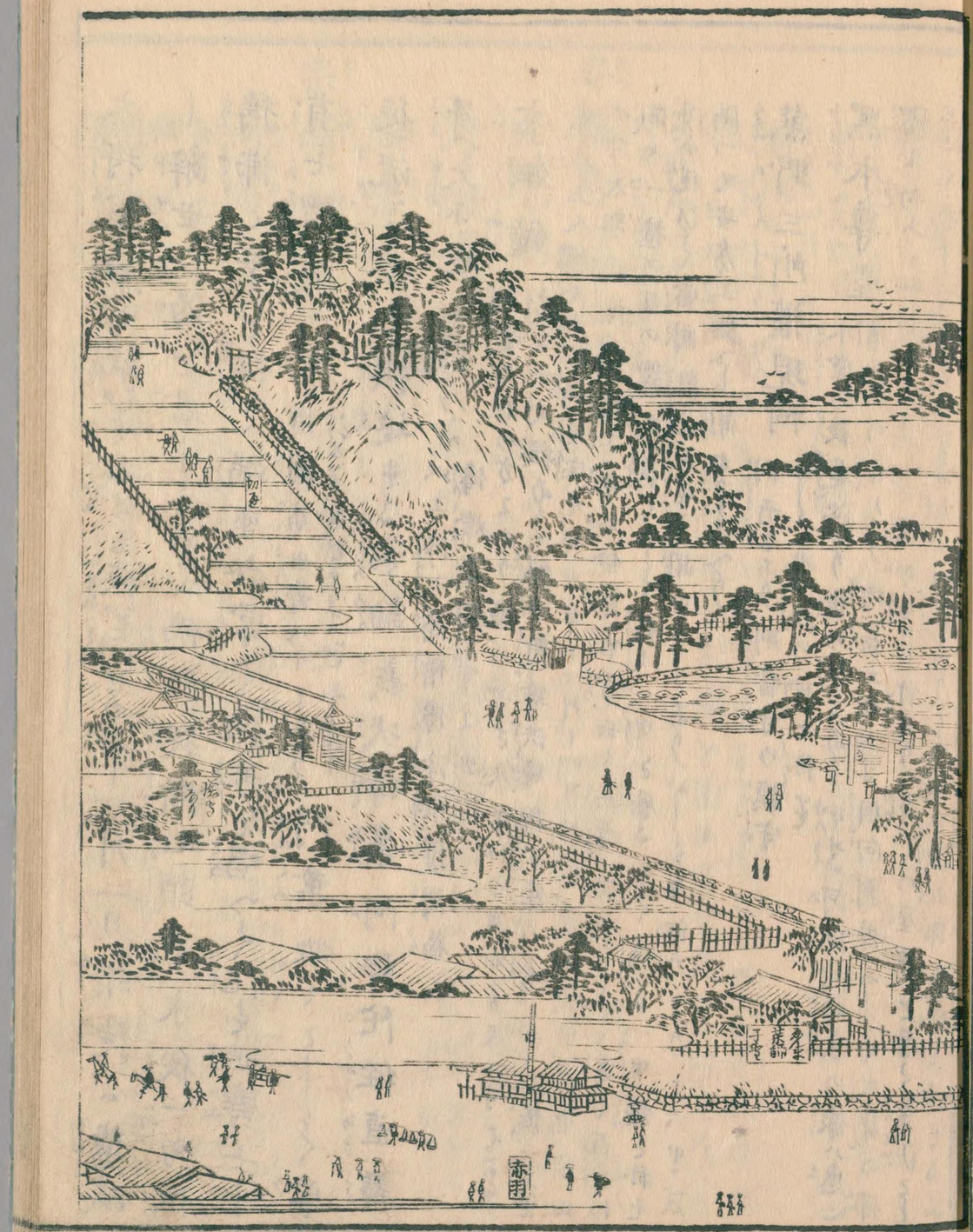


国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57

ガラス使用



上人に帰しく登壇受戒を天資聰悟にして顯密の教を
究む上人没後上蓑に到て長傳寺を創し大に法席を
開く人呼て教海の義龍蓮苑の祥鳳といふ天正十三年
雲誉上人の會下にあり同十七年八月璽書を傳兼して
増上寺弟十二世となる（當寺弟十二世なり）同十八年天下安靖なるに逮
んで大に
大神君の眷顧をもひ屢営中に請せしもて法要を聽
受しもひ崇信他に異なり竟に増上寺を修営せしもて
植福の地とおしもへり又
後陽成帝師を宮内に徴して道を問ふ盛に浄教を深
旨を陳す　叡感ありて褒章を加へ新に宸翰を染もひ
特に普光觀智國師の號を賜ふ時に慶長十五年七月十
九日なり元和六年師微恙を示す嗣君



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57

ガラス使用

大將軍親ら臨むて忝くも疾を問せ玉ふ十一月二日諸徒よ遺誡し辭世の偈を書しるし曰く佛話提撕心頭塵未後一句但稱佛と筆を抛く端座合掌し佛号を唱つゝ化を世壽七十有七僧臘六十獲國篇世壽八十とあるものを是なるものを徒流よ浴を撰述まる和論義決擇集阿弥陀経直譚等大ふ世よ行なる 以上浄土高僧傳浄宗獲國篇よ出つ

大銅鐘 本堂の右の方よあり一丈程あり銘曰新鑄洪鐘掛三緣山増上寺之樓二十六世森誉上人歷天大和尚延宝元癸丑年十一月十四日神谷長五郎平直重須田次郎太郎源秩嘉鑄工椎名伊豫吉寛云々其聲洪大しく遠く百里に聞ゆ一撞の響尤長くして餘韻百里を應るとく珍よ一里鐘と称せり北ふ從ひ當國熊谷の辺よ聞ゆるものありかゝるを江戸より十六里隔つ又安房上総へも聞ゆるものへり

熊野三所權現祠 同所よあり則當寺の鎮守なり

黒本尊堂 本堂の後蓮池より與の方よあり僧都の作なり 或云源信の作なりと 体よ向ふて左よ世人呼んで黒本尊と称せり 多くの星霜と雖く金泥ことく変して黒色となる故よ此称あり 或ハ漂九郎義経を抱き奉る木體なりとも

故よ九郎かるといふの意なりとも始参州桑子の明眼寺よありしを某の邑の寺よ迁し寺產不充此靈像を以て別當を安立院と号す 略之 新たに一宝帳玉扉構飾精巧を極むと 以上浄宗獲國篇よ載る 毎歳四月十六日四月八日同十七日諸人參詣をゆるさる

三門 元和九年癸亥建立或云八年なりと 十六間羅漢等の木像を置 四月七月の十六日二月八月の彼岸の中日又二月十五日四月八日よ登樓をゆるさる

安國殿 本堂構の外南の方よあり四月十七日八所祭礼ありく參拝を許さる 詣人多し 来由ハ其傳あるを以て是亦略之

五層塔 同所 御佛殿の地蒼林の中よあり 高サ 雅樂矣の建立なりとぞ

涅槃石 同所よあり 御影物師吉岡豊前作なりと 羅漢石 曼荼羅石 同所よあり 後藤祐乗得来の 鷲門 同所よあり 作ことを来迎石とも名つく

楼上よ釋迦文殊普賢

宗廟 御當家 御代々の 御霊屋なり

常念佛堂 涅槃門の右よあり 惠照律院と号す 浄土律やしく當山の當寺院中なり 御別當を務む

性壽庵 尾州清須城主松平薩摩守忠吉の霊牌を置故よ俗よ薩摩堂とよべり 側よ小笠原監物を始と殉死

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57

ガラス使用

五人の石塔あり柳の井といふも同所南の坂通りにある名泉なり

飯倉天滿宮 天神谷にあり當山の地主神なり昔飯倉の神明も此地にありしかるを社地に梅樹を多く栽て二月の頃一時の壯觀たり 宝松院別當を

茅野天滿宮 同所南の方松林院にあり神像ハ菅神の直作とぞ

圓光東漸大師舊跡 山下谷明定院にあり是も當山の別院なり明定院前大僧正定月大和尚明和七年に建立せらるゝ六間四面の堂にして戒壇造なり

圓座松 同所にあり

圓山 同所にあり

辨財天祠 赤羽門の内蓮池の中島にあり本尊ハ智證大師の作なり右大將頼朝卿鎌倉の法花堂に安置ありしを星霜を經て後觀智國師感得ありて當寺寶庫に納めありしを貞享二年生譽靈玄上人此所に一宇を建て一山の鎭守とあがめしを宝珠院別當たり中島を芙蓉洲と号く此所門より外ハ赤羽にして品川への街道なり

子聖權現社 山下谷にあり清林院別當に

産千代稲荷 觀智院にあり昔ハ普光院と号せしより當寺八合蓮社明譽檀通上人の舊跡なりといへり

阿加牟堂 東の大門の通り常照院にあり常念佛の道場なり

大門 東に向ふ當山の總門なり外に下馬札を建らる

御成門 北の方馬場に相對す此所に下馬札あり

涅槃門 切通の上にあり惠照院に涅槃像あるゆゑかくいふべし

柵門 山下谷より赤羽へ出る所なり赤羽門ともいへり

當寺舊古ハ貝塚の地にありて光明寺と號せし眞言瑜伽の密場なりしが後小松院の御願に依て草創ありし古刹なりしに至德二年酉譽上人移て住せらるの後竟に了譽上人（傳通院三ケ月上人の事なり）の德化に歸し寺を改めて三緣山增上寺と號し宗風を轉じて淨刹とす（事跡合考に出せる三緣山歷代系譜に云く當寺草創之地者貝塚今糀町邊中頃移于日比谷邊後慶長初移于芝云々日比谷より芝へ移せしハ慶長三年戊戌八月なり武德編年集成に慶長三年戊戌[illegible]る天正十八年辛卯平川口へ移されし增上寺を芝の地にうつさるとあり平川日比谷古へ地を接する故混じていへるか）

東照大神君天正十八年始て江戸の大城に入らせたまひし時州民鼓腹し老幼相携て道路に拜迎し奉る幸に寺門の前路を通御ありしより觀智國師も是を拜せんとして寺前にあり（是則比々谷の地にありての事なり）時に師の道貌雄毅尋常ならざるを見そなはしたまひ其名を問せられ乃寺に入て憩ひたまひ其後當寺を以て植福の地となしたまひ永く師檀の御契約ありて御崇敬あつく屢師を營中に請せられ法要を聽受なしたまひ侍せしむ禮を殊にし是を親王に比せられ師をして乘輿にて殿階に昇ることを得せしむ以て永式とす今に至て歷代の住持咸この榮をうく時に寺境隘狹にしてありしを

大城ゟ接近ゟ是乃ち谷ゟ依く今の地ゟ移さゝと大ゟ資財を喜捨し殿堂房室ゟ至るまゝ悉く営建しまひ最宏壮の大梵刹となる事跡合考は慶長十年乙巳本堂田廊等造営ありく大仏と称云く

勃興し念仏の聲天下ゟ洋くたゝ一朝門前の塵翁呼ゟ得て云く今夜祥夢を感を師微笑しく云く仍其夢を足を舁ふ既ゟて翁云く増上寺軒端の梧木撃人ゟ絡ることなりと果しく翌日伽藍営復の金壮観となる由浄土高僧傳ゟ抑当山ハ関東浄刹の冠首ゟく龍象の聚る名實ゟ霊山會上布金拘園ゟを比もへん數百戸の学寮ハ畳くゟく覺を連くゟを三千軒端を輾を支院ハ三十餘宇靡くとく餘の大衆ハ常にあふ集る中ゟも能化ハ一代の法蔵を胸間ゟ貯へ所化ハ十二の教文を眼裡ゟ瞞せゟと三心即一の窓の前ゟも五念四修の月を弄ひ事理倶頓の林苑中ふゝ実報受用の花を詠す佛閣の荘麗る七宝荘厳の浄土も又此を去る事遠くゟすとゝ思ゟる

御忌参 四月廿五日 涅槃會 二月十五日 誕生會 四月八日 開山忌 二月十八日 ゟ修ゟ行ふ一山悉く出仕ゟ近在の末寺ゟ出て大法会ゟ修ふ

十夜法會 十月六日ゟ同十五日迄修ゟ行ふ

飯倉神明宮 同東の方神明町ゟあり

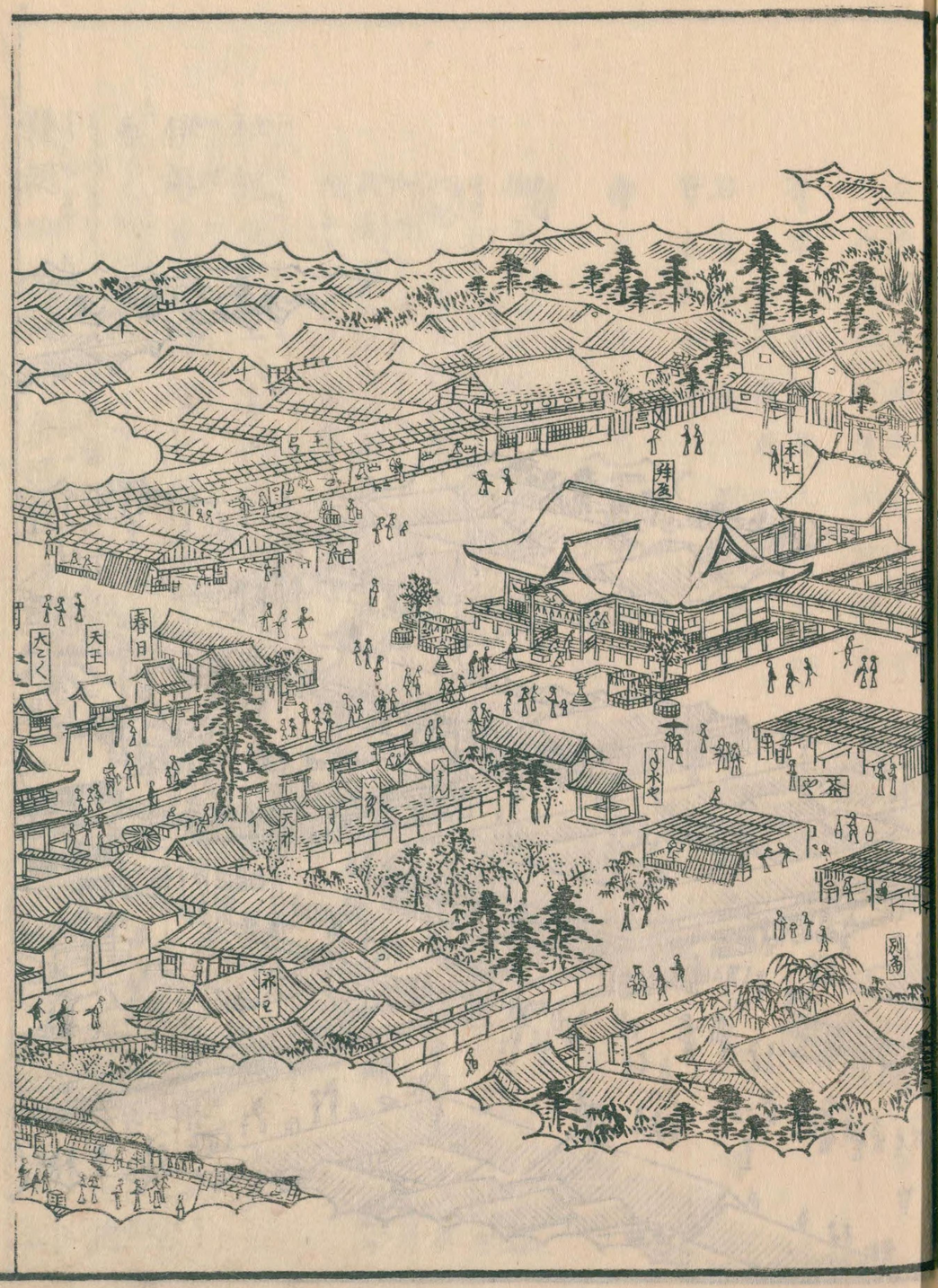
其舊地ハ増上寺境内飯倉天神の社地なりとも社司ハ西東氏江戸名所記等ゟ日比谷神明ゟ称ゟ山神明宮の地なりとも今俗間芝神明と称ゟ足柄郡ゟ齊藤氏なる人ゟ把く神主とすと云く別當ハ金剛院と号く其餘社家巫女ゟあり

神鳳抄云 武蔵國飯倉御厨

同書又曰 飯倉御厨 長日 當時四貫文 御幣五十丁

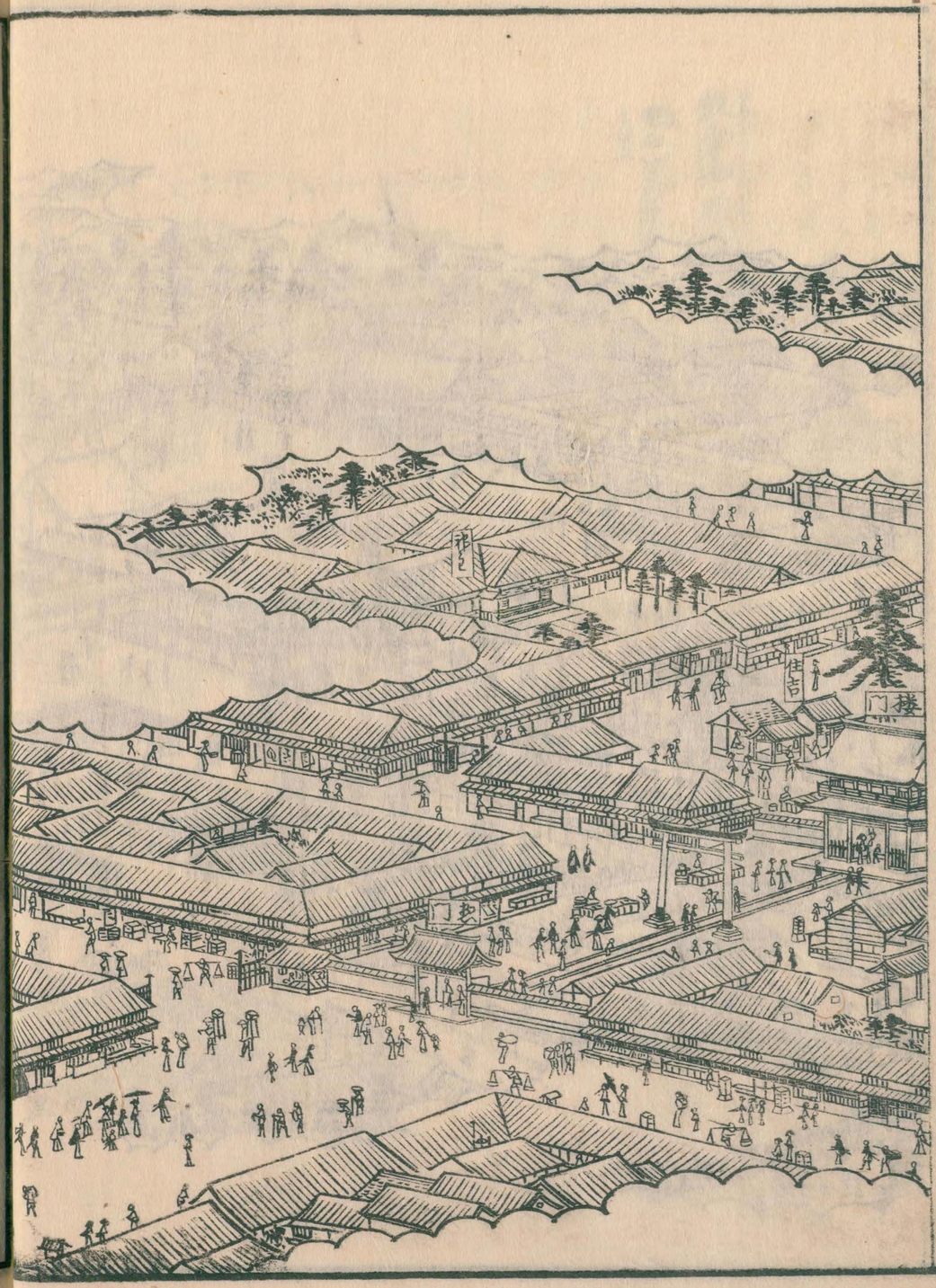
東鑑曰 壽永三年甲辰五月三日庚寅武衛被奉寄附両村於二所大神宮ゟ永暦元年二月御出京之刻感霊夢之後當宮事御信仰異他ゟ然ゟ着平家黨類等在伊勢國之由依令風聞遣軍士之時着縦雖為函嶋之在所不相觸事之由於祠宮被招之旨度々所被仰含也謂件両所者内宮御分武蔵國飯倉御厨宮一禰宜荒木田成長神主外宮御分

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用



飯倉神明宮
世に芝の神明宮
といへ

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用



安房國東條御厨被付會賀次郎大夫生倫訖爲
一品房奉行遣両通御寄進狀下畧

寄進　伊勢皇太神宮御厨壹處
在武藏國飯倉
右志者奉爲　朝家安
寄進狀如件

壽永三年五月三日　正四位下前右兵衛佐源朝臣

按に當社を飯倉神明宮と称しなるハ旧飯倉の地にあるゆへ此地に称せるなり其地ハ正に三縁山今の飯倉天満宮の社辺なり飯倉と云ハ往古此地に伊勢太神宮の御厨ありし故に地名を飯倉と唱へ又伊勢北御神を齊ましまへし猶飯倉の条下に詳なり又東鑑に同年正月武藏國大河土の御厨を豊受太神宮の御領に寄附のよし抔あれハ一國の内にもこゝかしこにありしなるべし

社記云人皇六十六代　一條帝の寛弘二年乙巳九月十六日
伊勢皇太神宮を鎮座なし奉る　其時神幣と大牙一枚此地に天降る又此地の童女に神綱ありて彼二種のしるしをあらはしてこの地に跡をとゞめ依て當社を営てまゐるとぞ　其後建久四年癸丑右大將
頼朝卿下野國奈須野の原狩獵の時當社の神殿に寶劍

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

一振を納め一千三百餘貫の美田を寄附ありて其頃繁昌の宮居たりしに遙に後明應三年伊勢新九郎氏茂小田原北城主大森實頼を亡して後威を逞うせし頃是ゝ為に神領を掠せらる依て宮社ハ霧に朽風に破れ奉祀の人もなく大に荒廢したりしを天正に至り四海昌平の御時忝くも台命によりて當社の廢れたるを興しまゐ神領若干を附せられ又寛永十一年甲戌にいたり神殿を修造なしあひしより社頭舊觀に復す依神燈の光ハ赫々として和光の月にあそらへ利物の花ぬさハ匂ひ深くして神威背に倍せり

當社の祭例ハ九月十六日なり同し十一日より廿一日に至るのゝ參詣群集を商ひ物多きゝ中にも藥の花を画きたる檜割籠 [illegible] 土生姜珠に彫し故に世俗生姜市又生姜祭とも唱へたり江戸名所にハ臼杵木鉢鮓菓物多しとあれど今ハ是を鬻うす檜割籠を俗にちきと名つく又生姜を賣るハ尤久しきよりのるゆゑ至拠を志らす

宇田川橋 宇田川町の大通りを横切て流る小溝に架せり

日比谷

稲荷社

毎年初午祭ハ二日以前より添助町と其口三丁目のゝ横少なく仮屋を補理ひ御輿に旅出ありて此辺の蕃昌いふもなりし

今ハ上に土を覆ふ故に橋の形を失ひ宇田或ハ宇多に作る小田原北條家の臣宇多川和泉守といへる人架せしと云傳ふ小田原北條大小四年上杉修理奏朝與北条氏総に責られ品川表にて戦ふと云条下に氏総朝與を亡し首とも実験ありて後品川の住人宇田川和泉守以下降参の者ともにやつけ普請移んころに沙汰せとあり東海道驛路鈴に長禄元年丁丑四月八日大田道灌江戸に入る其後宇多川和泉守長清ハ品川の舘に住とあり又元禄開板の江戸鹿子といへる草紙に昔此所へ宇田といふ刀を墮しける故に此名ありといへ共證とするに

日比谷稲荷祠 芝口三丁目西の裏通りにあり 此所町巾至て狭し故に土人日蔭町と字す

本山方に修験寂静院別當たり萬治の頃藍屋五兵衛といへる者託宣に依て花洛藤森の稲荷を勧請なせしやいへり 日比谷昔ハ比々谷に作る小田原北条家の所領役帳にも比々谷に作り此地を大胡宮内少輔所領の中に加ふ

烏森稲荷社 幸橋より二丁斗南の方酒井下野侯邸の北に横通りにあり往古よりの鎮座といへとも年歴来由共に詳ならず 元禄開板の江戸鹿子といへる草紙に天慶年間藤原秀郷将門退治の時の勧請なりといへとも信としたし又如何ある故ありしや當社の神宝に古き鰐口一口を納む 表に元暦元甲辰年

正月下河辺庄司行平建立と彫付てあり江戸名所ちゑしるべに日比谷稲荷の条下に云く此宮地ハ借地なくありしに既に断絶におよぶべき頃稲荷の神宮守に告て古来よりの鎮地なりとて鰐口をとりて与へ宮守公へ訴へ此證によつて宮居つゞきたりとあるハ當社の事を誤るなるべし或人云く明暦の回禄に奇瑞ありしかバ其後社の辺除地と社司山田氏を柳営御連歌の御連衆より別當ハ快長院となりしを號しく本山方の修験なり祭禮毎年二月初午に執行ふ幸橋御門に假屋を補理て神輿を移して参詣群集して賑へり

古河御所足利成氏願書一通當社に蔵す

稲荷大明神願書事
今度發向所願悉於成就者當社可遂修造願書
之状如件
享徳四年正月五日　左兵衛督源朝臣　成氏判

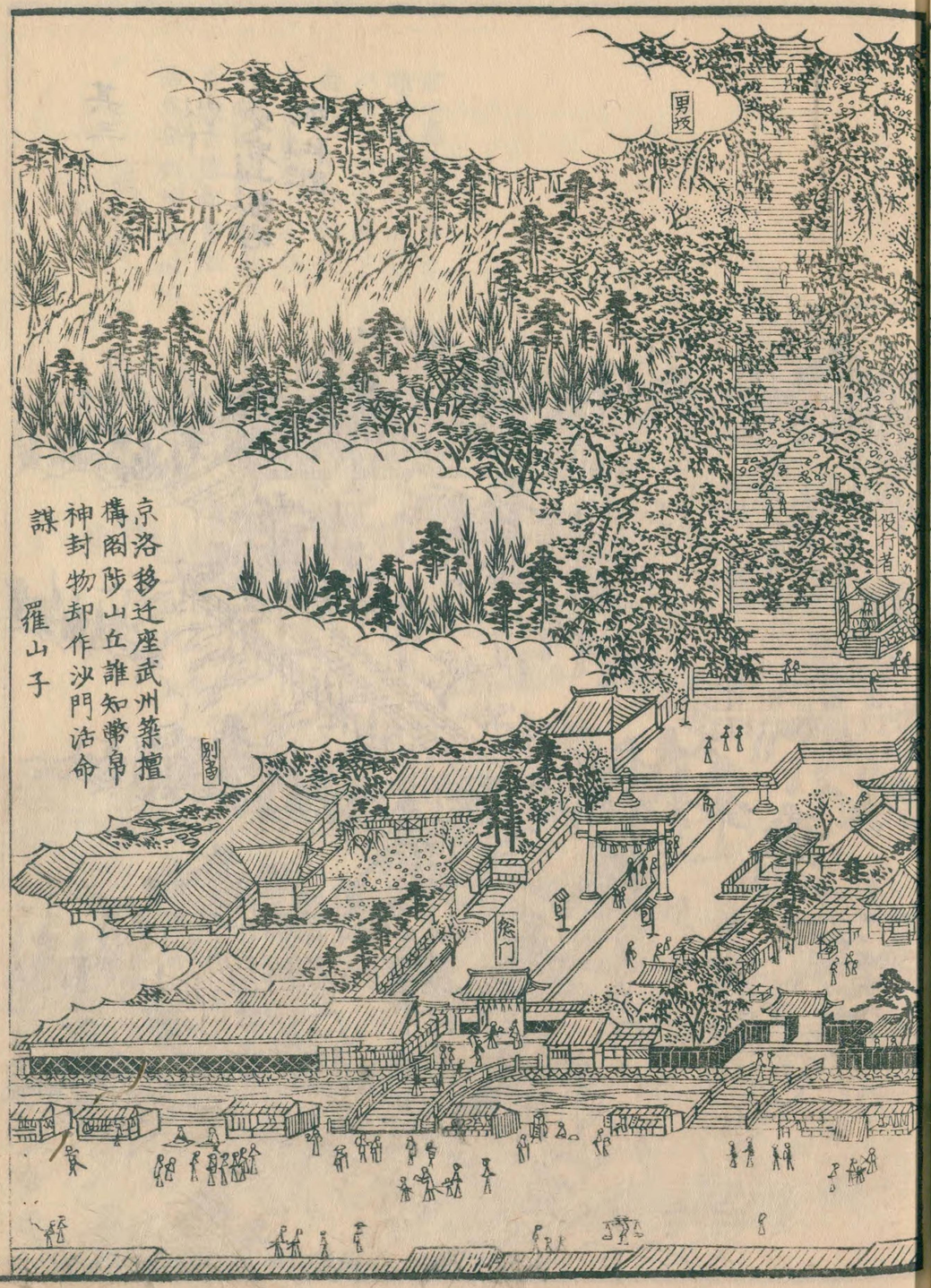
藪小路 愛宕の下通り加藤侯の邸の北の通りを云同所民の裏門の傍に少しばかりの竹叢あるも故にしかいへりされど其來由詳ならず傳説あれども證とすべし 慶長より寛永の頃に至り細川三斎侯此地に住せらるゝその庭中の小池を三斎堀と號くといへり

藪小路

櫻川　同所愛宕の麓を東南へ流る溝川をしゝ名く新著聞集に昔虎の門の辺より愛宕の辺迄悉く田畑にて畔に櫻樹幾株ともなくあるし其中を流るゝ所櫻川をいひしとあり（下流ハ宇田川橋の方へ流れ又三縁山に傍ふく金杉の川へも落合へり）

摩尼珠山真福寺　櫻川の西岸に傍ひくあるを新義の真言宗にして江戸四箇寺の一員知積院の觸頭なり當寺本尊藥師如来の靈像ハ弘法大師の作なるを慶長の頃甲州の領主浅野長政當寺中興照海上人をして自らの等身に藥師佛の像を手刻せしめ件の靈佛をハ其胎中に籠まるといへるも（毎月八日十二日ハ縁日にして參詣多し）

愛宕山權現社　同南に並ぶ世俗城州愛宕山に同しといへるも自ら別なり本地佛を勝軍地藏尊にして行基大士の作なり永く火災を退けまゐの守護神なり樓門の金剛力士ハ



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

其三

山上
愛宕山権現
本社図

宕山高倚勝軍宮
晴日登臨積水東
江樹千里連闕下
海雲一半傍城中
祇憐精衛仍含木
誰識鵬鯤忽擊風
羞殺魚鹽都會地
治生無似陶朱公

服元喬

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

運慶の作同二階の軒よ掲し愛宕山の三字ハ智積院権大僧正の筆なり別當圓福教寺ハ石階の下よあり新義の真言宗江戸の觸頭四箇寺の隨一なり開山を神證上人と號す二世俊賀上人なり（四箇寺ハ湯島根生院本所弥勒寺當所圓福寺並ふ當寺をいふ）

神證上人ハ字を春音といひ後ハ鹽谷氏母ハ宮川氏なり元和五年天年を終ふ春音の坊ハ遍照院と号を今の圓福寺是なり満蔵院鏡照院壽桂院等ハ六院あり俊賀上人ハ下野の人にて姓ハ金剛院普賢院と号し野州西方邑の人姓ハ越路氏なり宇都宮弥三郎頼綱の後裔父ハ伊勢守近律神祠を祈て産す其始下妻の圓福寺ハ住持然るよ其頃下総結城の元寿上州松井田秀業等一世の豪俊賀上人愛宕権現の別當よ命せられ共に新義の三傑と称せらる元和五年俊賀上人愛宕権現を樹大法幢を擊夏冬廃る事終よ檀林職と闢めり永く大法幢を樹大法鼓を擊夏冬廃る事終よ檀林職と起る実よ江城檀林の権輿なり

雲の如く集て川の流るゝ如く也て縁起曰天平十年戊寅行基大士江州信樂の辺行化の時當社の本地持軍地蔵尊の像を彫刻して奉る第四十六代孝謙天皇の御宇なり

親王則彼地よ宝祠を營建して安置やしよ（其旧跡を今宮村と呼つゝ）然るよ天正十年壬午の夏台祺泉州を發しめし大和路よ字治を経て江州信樂よ入せ賜ふ此時多羅尾四郎右衛門といへる者の宅よ舎らせらるゝ頃あるし此像を齎せ多羅尾家譜よ（左京進光俊初て多羅尾と号其子常陸介綱知三好若江の三人衆といふ其子四郎兵衛光綱江州信樂を領す云々多羅尾八四郎左衛門よ其節同國磯尾村の道賀のすなり）道賀ハ四郎兵衛光綱入道あるし

沙門神證ものを供せしむ此靈像を持して東國よ赴のみ雨より御出陣毎よ神燈をかゝげ此勝軍地蔵まを祈念せしめる遂よ慶長八年癸卯の夏子年石川六郎左衛門尉當山を開き假よ堂宇を造建し台命よりて同庚申其後同十五年庚戌本社を始め悉く御建立ある元和三年丁巳同國豊島郡王子邑よ於て百石の社領を附しものか

（惣鹿子といふ冊子よ此地ハ元櫻田の村民内藤六郎といふ人の宅地なりし後れ荒果て沙門春音慶長庚子の御出陣よ勝軍の法を修せし地ゆゑ山徒ハ元櫻田と称すと云々又同書に慶長八年九月廿四日貴賤の参詣を許されよりふよふく當社と御建立ありしと云々又同書に江戸名所志同名所の條よ後ハ鳴子坂よ勧請ありし夫より江戸名所図会 7巻 渡辺崋山 著 天保5-7年 [1834-36]

又愛よ始山城の愛宕を遠州鳴子坂よ勧請ありし夫より江戸名所図会 7巻 渡辺崋山 著 天保5-7年 [1834-36]

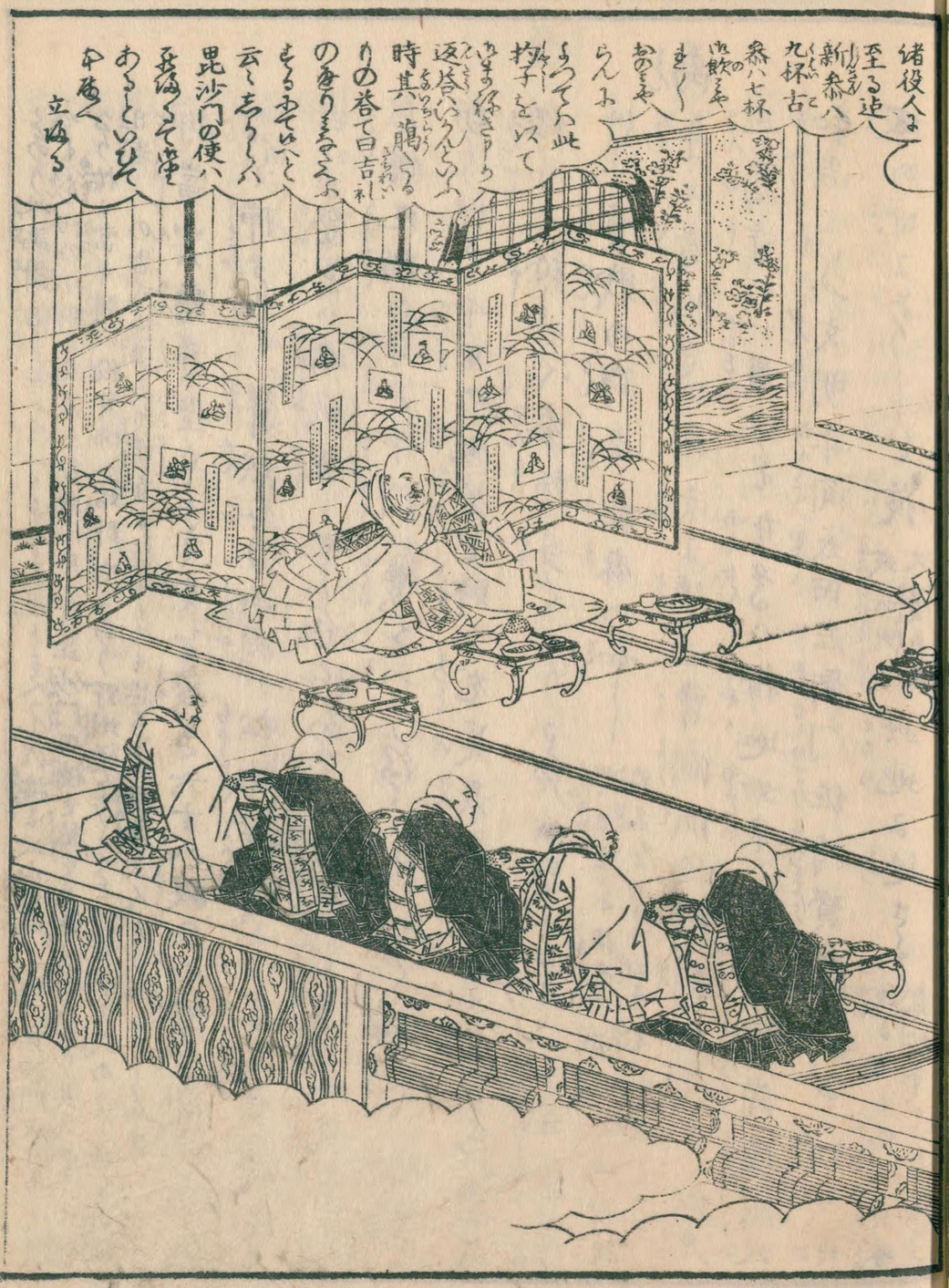
置す慶長の頃本多美濃守の家臣都築某といふ人の創勧請ありし

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57

ガラス使用

愛宕山田福寺毘沙門の使ハ毎歳正月
三日に修行し女坂の上愛宕やといへる
茗肆のあるし旧例ゆへこれを勤む
この日寺主を始とし支院よりも
出頭して其次第あり座を儲け
強飯を餐す半に至る頃此毘沙門
の使と称する者麻上下を着し
長き太刀を佩雷槌を差添又
大なる飯ゆゑを杖に突初春の
飾り物にて兜を造り是を冠る
相随ふもの三人共に本殿より
男坂を下り田福寺
に入て此席に至り
俎机によりて行
飯ゆゑをもて三度
魚板をつきなら
して曰
まつり出る
者ハ毘沙門天の
使院家役者
をしや寺中の
面々長屋の
所化も勝手の

緒役人に
至る迄
新参ハ
九杯古
参ハ七杯
飲ゑや
まく
おのゑや
らんに
よつてハ此
杓子を以て
はまゆきやり
返答いたしといふ
時其一臈なる
もの答て曰吉礼
の事りまゐるに
もるにていへと
云々しかるハ
毘沙門の使ハ
兵ゆるて常
あるといひて
本殿へ
立ゆる



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

とあり此説圓福寺よ云ふるまなく證とも
今も本社の日殿を安置を毎歳正月三日毘沙門の像と称する舊祀の式あり其式畫上ゟ詳
なり按ゟ當寺開山俊賀師ハ始野州まゐり野州辺ゟ日光の古式ゟ准ふて當寺ゟ行ゟのも恐らくハ俊賀上人ゟり始るなるへん歟
抑當山ハ懸岸壁立しく空を凌き六十八級の石階ハ疊くとして
雲を挿ぐめく聳然ゟり山頂ハ松柏鬱茂しく夏日といへども
あゝゟ登るゟハ涼風凜こやしてち多ゝ炎暑をとゝる見落せ
三條九陌の万戸千門ハ覺をつゝ移く所せく海水ハ渺焉と
ゟりけく千里の風光を貯へ尤美景の地なるゟ月ごとに廿四日ハ
緣日と称しく參詣多くとゝりつゝ元六月廿四日ハ千日參と号
けく貴賤の群參稲麻の如しく 緣日ゟ植木の市立四時ゟ花おをとゝふ也壮観なり
萬年山青松寺 同南ゟ隣る曹洞派の禪刹ゟしく江戸
三箇寺の一員ゟゝ本尊ハ釋迦如来開山を雲崗俊徳大
和尚とゝゝ文明年間太田左衛門佐持資草創を初を貝
塚の地よりしを後 或云天正 又慶長ゟ此地ゟ迁さる 故ゟ今も俗ゟ貝塚青松寺と称せり

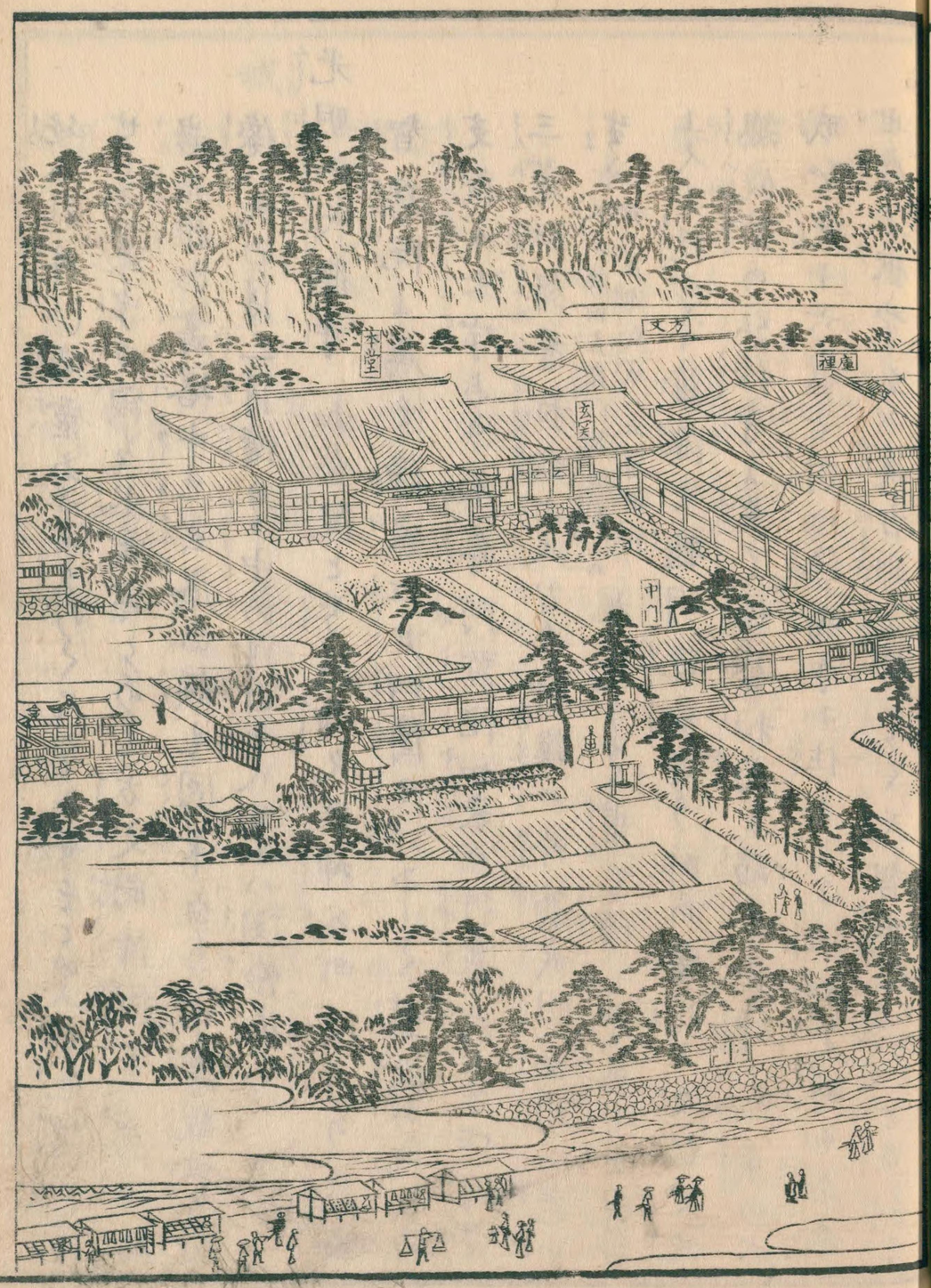
一ゟ青松寺の旧地ハ今の平川馬場の南の方なりと云く南向亭云く青松甲斐
と云人草創を其旧跡ハ糀町の貝塚當時玉虫八左衛門と云る屋舗ゟありしく
彼墓を甲斐塚と云と菊岡沾涼ハ青松寺ゟ太田道潅の塚ありとゝゝた詳ならず
當寺の後の山を含海山と号くしく眺望愛宕山ゟ芝ゟしく美景の
地なるゟ惣門の額万年山の三大字を閻沙門道霈の筆

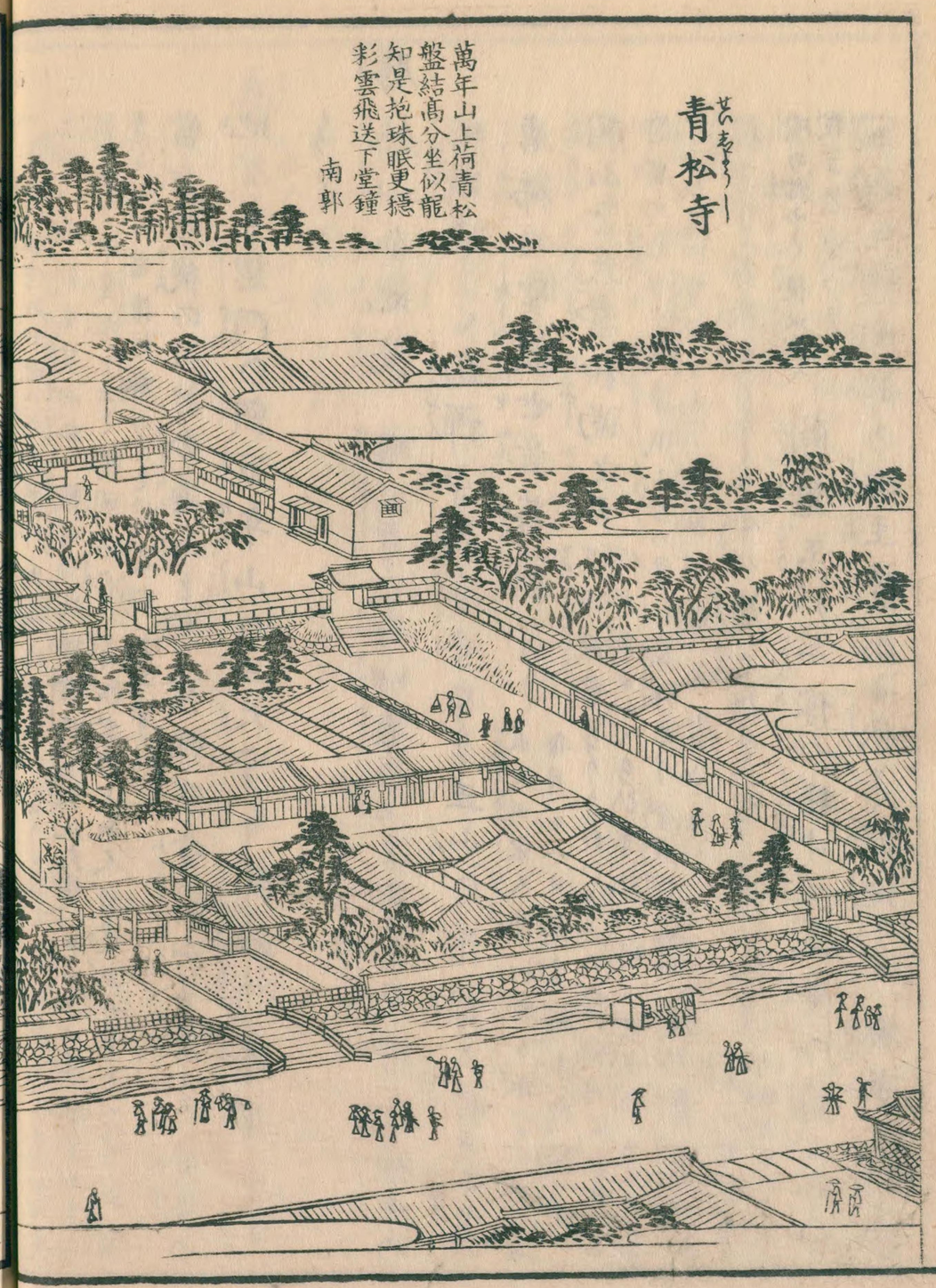
勝林山金地院 増上寺の西切通の上よりも京師南禪寺の
塔頭ゟしく南禪寺ゟ宿寺なり五山の僧録と称をゟハ
唐佛の聖観世音菩薩なり 或人云宋人陳和卿作なりといふ
開山を大業和尚と云 毎月十八日觀音懺法修行ゟす
都留の毛衣と云草紙ゟ古ハ寺社裁許のゟ武家の職と
なる云く 寛永中より
称する古木ありしく今ハ焼亡しくなりやしぬ
頃の物ゟしく後此地へ栽ると 閻魔王ゟ石像ハ塔中二玄庵の前よりあり
宝永の頃南部の領主靈尓ゟ依しく彼地より麻布の別荘ゟ

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

青松寺

萬年山上荷青松
盤結高分坐似龍
知是抱珠眠更穩
彩雲飛送下堂鐘
南郭





国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

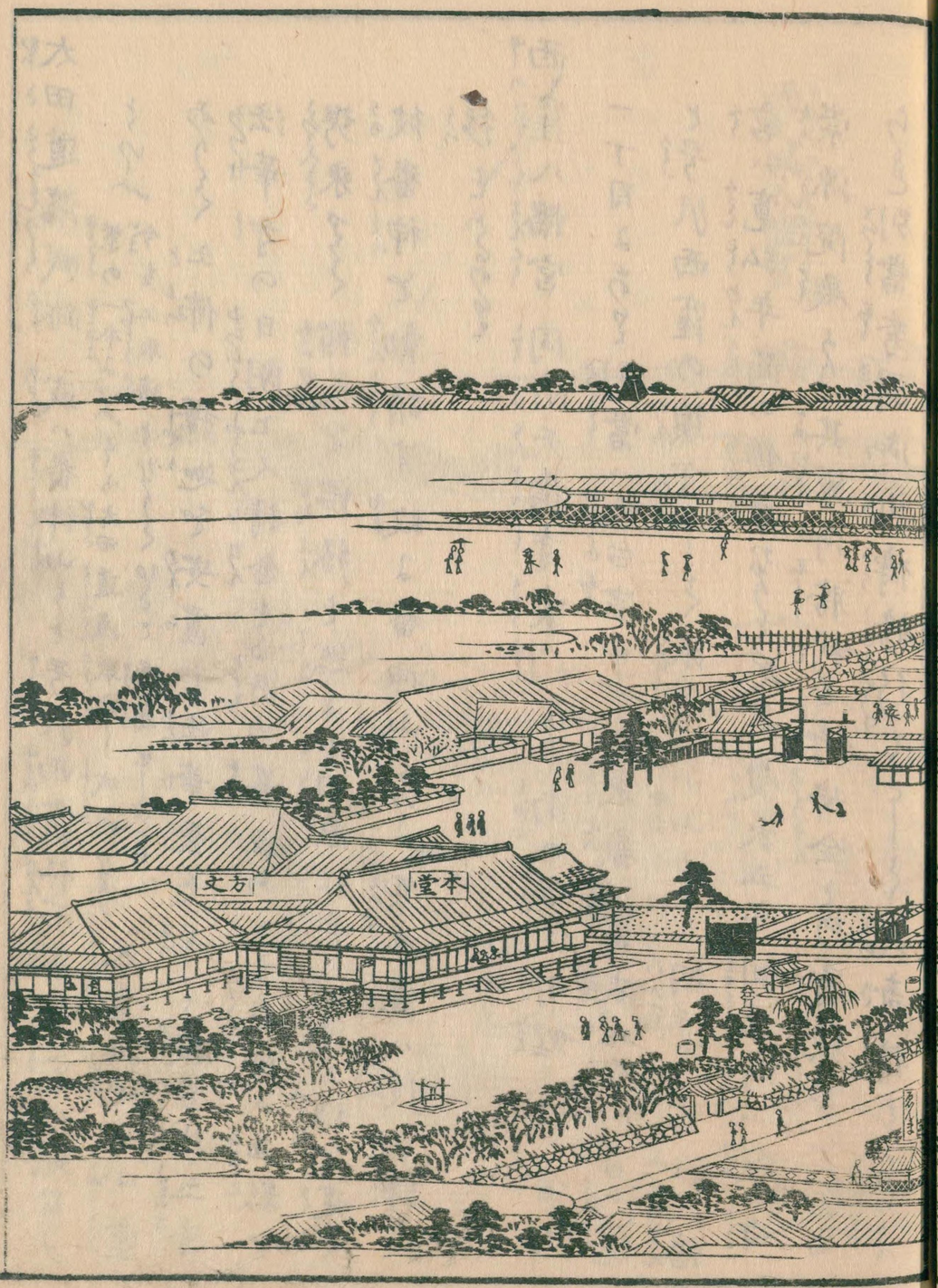
迁され再ひ威霊あるによりて又こゝに安をといふ金地院と書せし三大字の額は水雲寫とあり方丈同淬溟筆薦福殿岩元雄の書塔中二玄庵の額も同筆なり本尊観世音の像ハ大の月三月續ける中の月の十八日にハ開帳あり

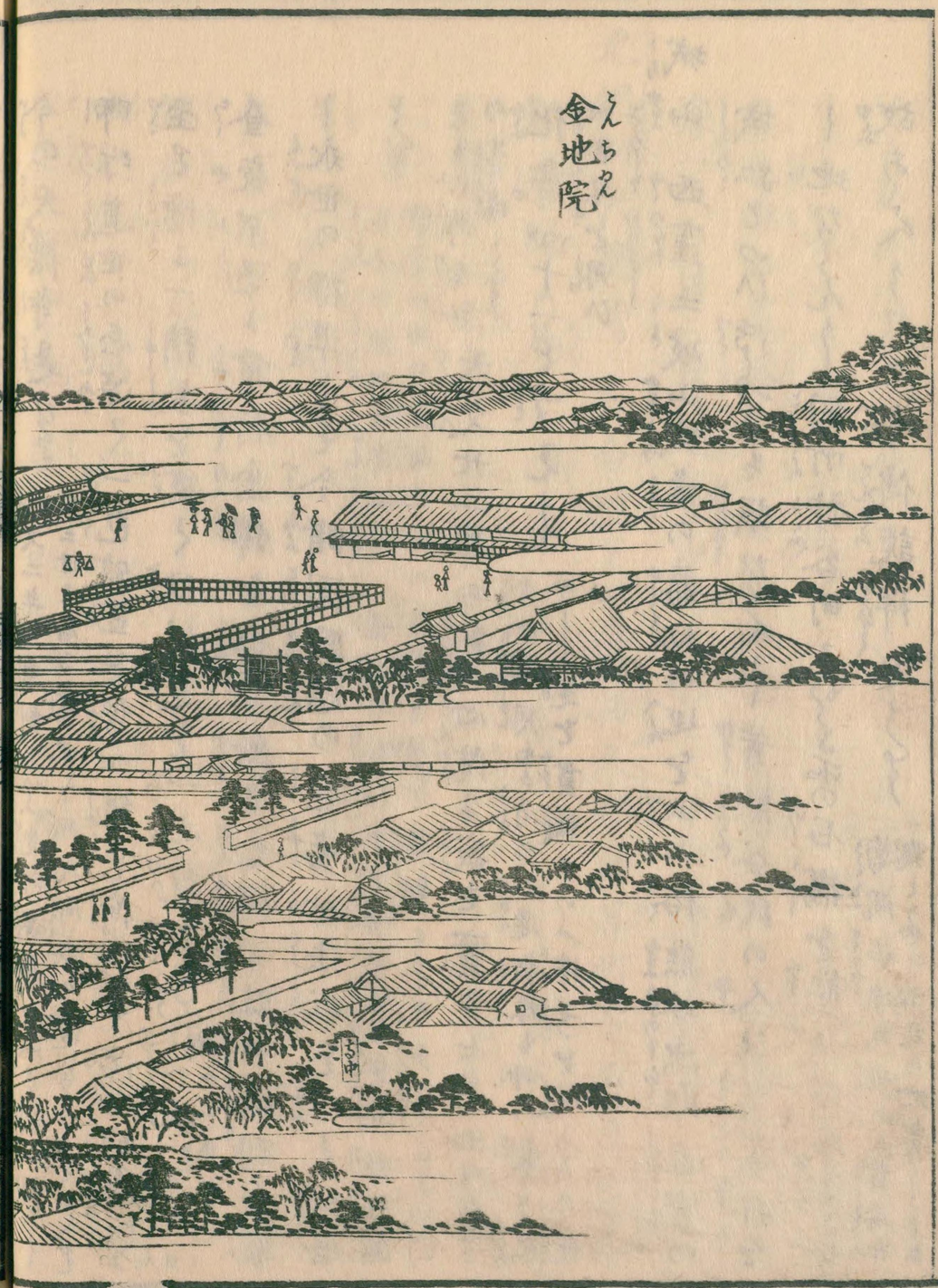
光明山天徳寺　和合院と号ハ西久保神谷町にあり花洛智恩院に属す浄家江戸四箇の一にして紫衣の地なり支院十七宇あり本尊阿弥陀如来ハ行基大士の作開山ハ三蓮社縁誉称念上人なり師諱ハ吟翁武州品川の邑に生る（父を藤田左衛門尉道昭と云母ハ冨永氏或ハ云冨田氏）九歳にして甫て増上寺第七世親誉上人に従つて薙染す聰明絶倫なり師の遷化に及ひて北總飯沼の弘経寺に至り鎮誉和尚に謁して浄土一乗の大戒を受十六歳岩附の浄國寺に住し大に法輪を轉す志猶世塵を厭ふ所に後古郷に帰りて天智庵（知或ハ又地に作る）を草創す

今の天徳寺是なり（天文二年の草創といふ先師親誉を以て開山祖とし自二世に居る舊地は西丸御城の邊なりしといへり）師所道世の志深く一包破笠を携へ錫を荷ひて浴の知恩院に至り傍に一精舎を建て住ハ是を一心院と号（一心院ハ念佛三昧の一本寺）昼夜不退に常行念佛を修し新に念佛三昧の法則を製し永世の標準とす今諸國厭悠の道場此法式を以て定矩とす（花洛市原野の専称庵上嵯峨の称念寺下嵯峨の正定院桂の極樂寺田井の會念寺淀の念佛寺等を草創するの少からはいへり）天文廿三年の秋一心院に寂す實に七月十九日なり（此の道場とす）化壽四十一と呼えし（今世間用ゆる所の二連數珠も師の製する所にして是を貫輪といふ佛号を唱ふるの徒此念珠を用ひ）

城山西窪土岐山城侯の藩邸の辺を云土俗熊谷次郎直實の城跡といひ傳ふるは誤なるへし昔熊谷氏の人此居宅抔せし地ならんかし同所神谷町にかゝる所の石橋を熊谷橋と号るも故あるへきれと今傳説詳ならず（菊岡沾涼云此所ハ昔麻布殿とかやの出丸の地なりしと云）

金地院





国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57

ガラス使用

太田道灌城跡　或ハ番神山とも号ハ西窪仙石家弟宅の地なり
といふ　紫の一本にいふ　そも太田道灌取立し城地なり　又昔此地に小堂
今も土取場となりて　堀崩せしと云
ありて土佛の釋迦を安置し法華堂と号く後豆州玉澤
法華寺の日朗上人持念する所の墨画の三十番神の画影を
携来りて諸人を結縁せ然に小田原北条氏後に社を建て
彼番神を勧請す故に番神山といふ其画像ハ後京師に
移せとあり

西窪八幡宮　同所天徳寺裏門より南の方三町程飯倉町
一丁目にあり別當ハ天台宗にして東叡山の末八幡山普門院
と号ハ西窪の鎮守にして旅所ハ小山にあり相傳ふ當社八幡
宮ハ寛弘年間の鎮座なりといへり慶長五年関原御一戦の時
崇源院殿より其軍御勝利と御安全との御願書をあり
らせ別當秀圓御祈禱修行ありしに其奇特ありたれハ

西久保八幡宮

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

寛永十一年甲戌二月終に宮社御建立あるしとより祭禮ハ
毎歳八月十五日なり

飯倉　西窪の南を云此地ハ往古伊勢太神宮の神厨の地なるを
し故に其所饌料の稲を収めし倉を飯倉と唱へいひしか
地名に呼なるなるへし　永禄の頃小田原北条家の臣大草左近太夫
飯倉彈正忠太田新六郎島津孫四郎等此
地を領せしより北条家の所領役帳にみえたり同書に飯倉の内櫻田と
あるハ往古飯倉の地の廣かりしなるへし又駒込吉祥寺に蔵する
所の北条家人遠山左衛門太夫政景元亀二年江戸にて五十五貫六百八十五文
の地を彼寺に寄附する状に飯倉の地名ありて此中三貫三百文ハ以前より
箕輪大蔵か寄附せし地なりとあるを猶前の芝神明宮の条下も
神鳳抄東鑑等の書を引據とす照合せらるへし

熊野権現宮　飯倉町にあるを或人云養老年間芝の海濱に
勧請あるしを遥の後今の地に移さるとそ別當ハ三集山
正宮寺といふ天台宗にして東叡山に属せり　毎年六月朔日より三日
まて祭礼を修行す

勝手か原　土器町より赤羽へ出る廣小路の辺をいふとそ背ハ三田の
方へかけて廣漠の原野なりしかハ太田道灌江戸の城よりも

飯倉
熊野権現社

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

製を出す時は此所にて人數を揃らまた

赤羽川　渋谷川の下流なるも新堀と号く

の江戸鹿子といつる冊紙より元禄の始釣命ありよつて是を堀らしめ

此河のほとり赤羽の池と云あり江戸名勝志より溝口信濃守伊達美作守

たるものとおもはるゝ

赤羽橋　同し流より架を按るに赤羽より赤埴の轉したるなるべし

此辺茶店多く河原の北にあり毎朝青市立て繁昌の地なり

心光院　同所橋より北の河原道より右にあり増上寺の別

院かしこ宝暦の頃豚山より此地へ移さるる　其旧地は涅槃門當

寺は鎮西上人の古跡かしこ常行念佛の道場なり恵照

律院光阿上人開基なり　光阿上人は　横連社縦誉心岩頑夢と号す

加州小松の人　姓は加彼氏　越前浄光院の隨

流より投しく勅法頭より　開法を宝永三年丙戌八月晦日當寺

移し　不斷念佛の道場と

加州大日寺及ひ當寺并惠照院等

右引觀世音菩薩　境内より安置を本尊とし其馬頭觀音は

長重奥州二本松より在國の時　馬に乗るとて奉持せるとの

其馬數疋ハ農人よりとゞめ　熊野道者の馬ふ乗

名馬なりとて

道着と唱ふ絵よ　大將軍家へ献を駈を追せ

両方よりふ附ふ彼布一文字より離る故より改

件の石塔を本尊として馬頭觀音より崇むるとなり

引れしとぞ

竹之水盤　新著聞集より云江戸大徒馬町佐久間勘解由より呂仕の下女たけハ

天性仁慈の志深く朝夕の飯米己が分ハを丐人より施し其身ハ

水盤の角より垣を置く洗ひ流しの飯をうけ共溜をり

常より称名怠るまく後より大往生を遂しとぞ

水盤ハ今増上寺念佛堂心光院の門の天井より掛くる

明を放ちしとぞ　ハ當寺の像起の中より洋なり

芝浦

本芝町の東の海濱をいふ芝口新橋より南田町の邊迄

惣名なるも上古ハ芝を竹柴の郷とのみ呼来るも又文字も芝より書改しとぞ

猶三田済海寺の条下より詳なり南向亭云芝と

近き所より柴を建海苔のかゝるとぞ方ふ木の小枝を柴といふ

しより後芝より改作ると云く按より此説是なるべし

昔ハ今の如く品川ハ入なりしかハ古へよりの地名なるべし

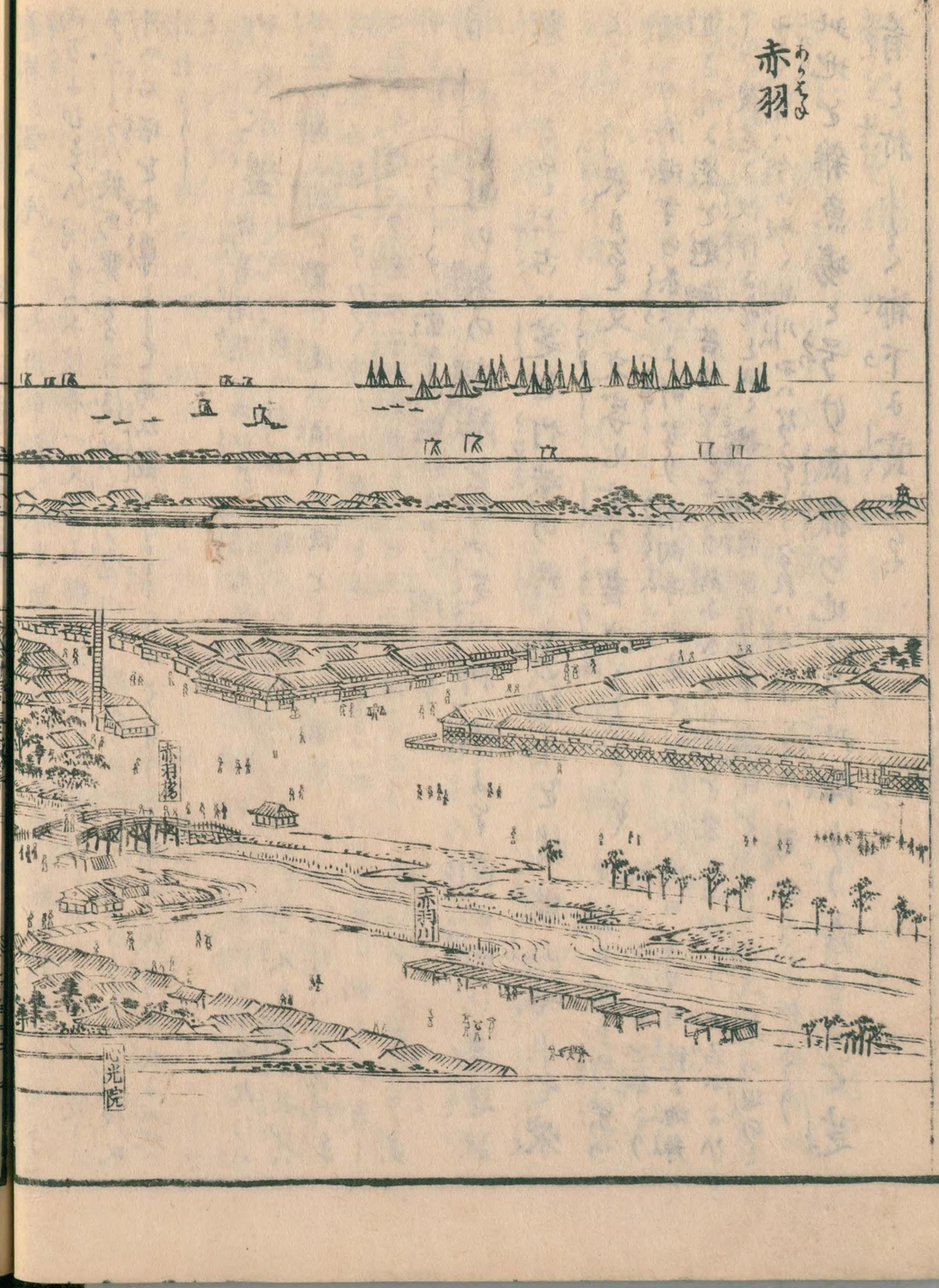
此地を雑魚場と号け漁獵の地なりしを

看と称しく都下より賞せしより　此海より產するを芝

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57

ガラス使用

赤羽（あかばね）



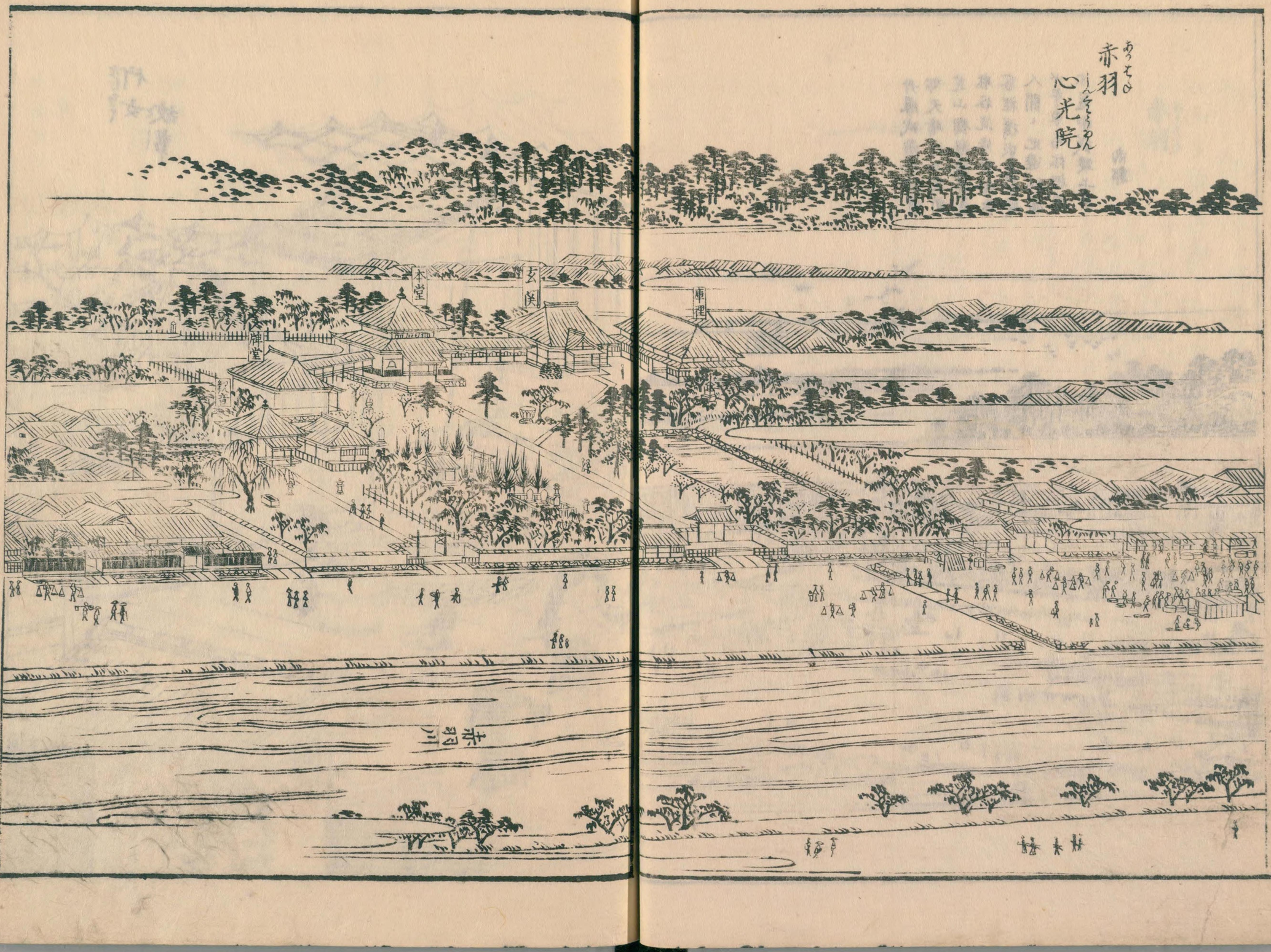
丹鳳城南赤羽濱
郊天晴近五雲新
芝山樹擁銀臺色
麻谷流侵碧海春
客裡攜家羞白髮
人間ト地避紅塵
少年車馬休相訝
沐罷聊裁頭上巾

南郭

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57

ガラス使用

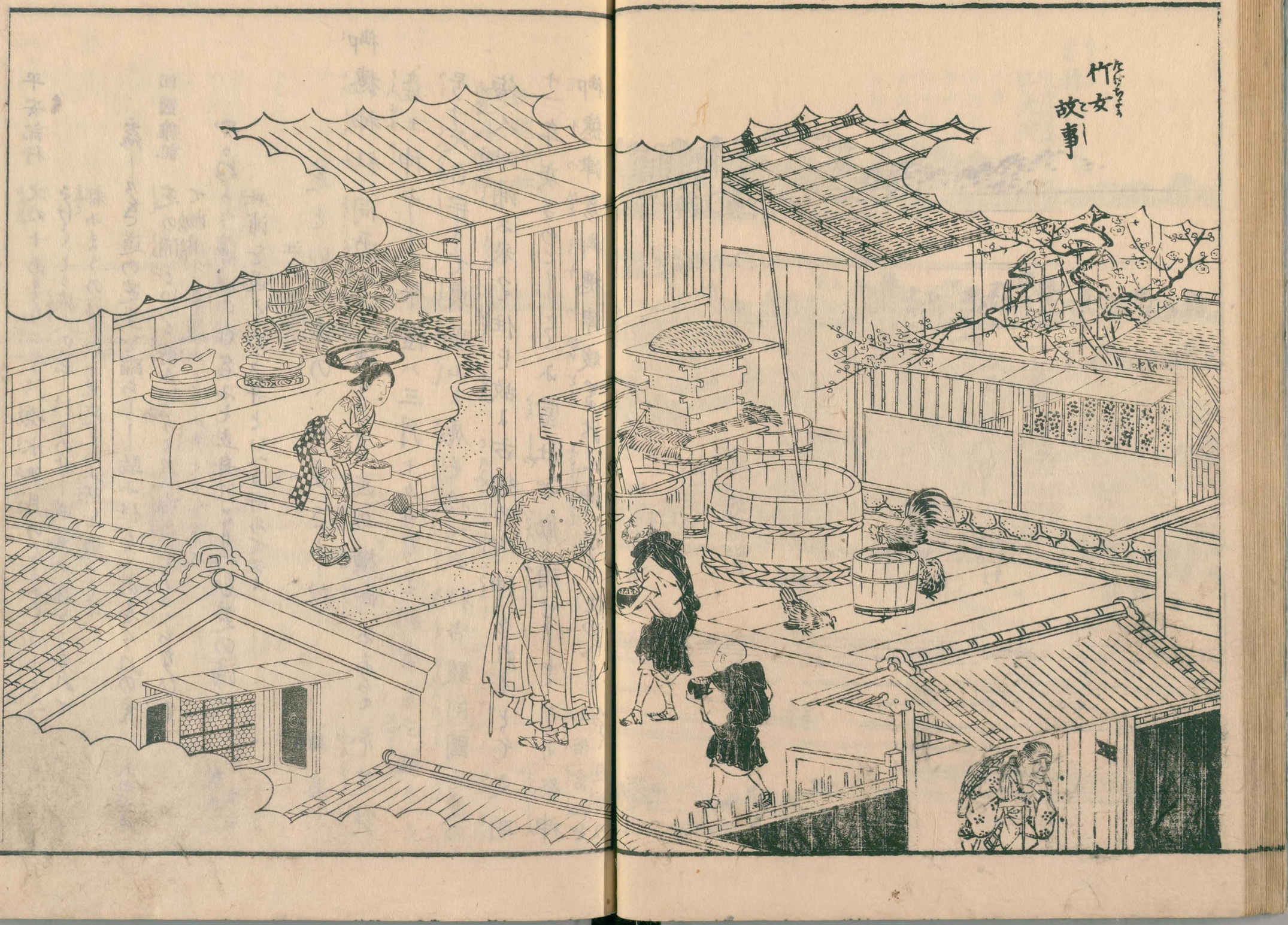
赤羽心光院（あかばねしんこういん）



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57

ガラス使用

竹女と故事



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57

ガラス使用

平安記行　文明十あまり二年の頃水無月のはしめつかた土さへさけくとか旅人のゆしかりのせし避暑の床をはなれて都にまうのほりね　中畧芝といふ所を過るとて

露しろき道の芝生を踏ちらし駒に任せるあきくれのを　太田道灌

田國雜記　芝の浦といへる所にいたりたれハ塩屋のたゝりうちなひきて物淋しきに塩木をとふ舟とりを見て

やかねより藻汐の煙名にそ立舟にこりつむ芝の浦人　道奥准后

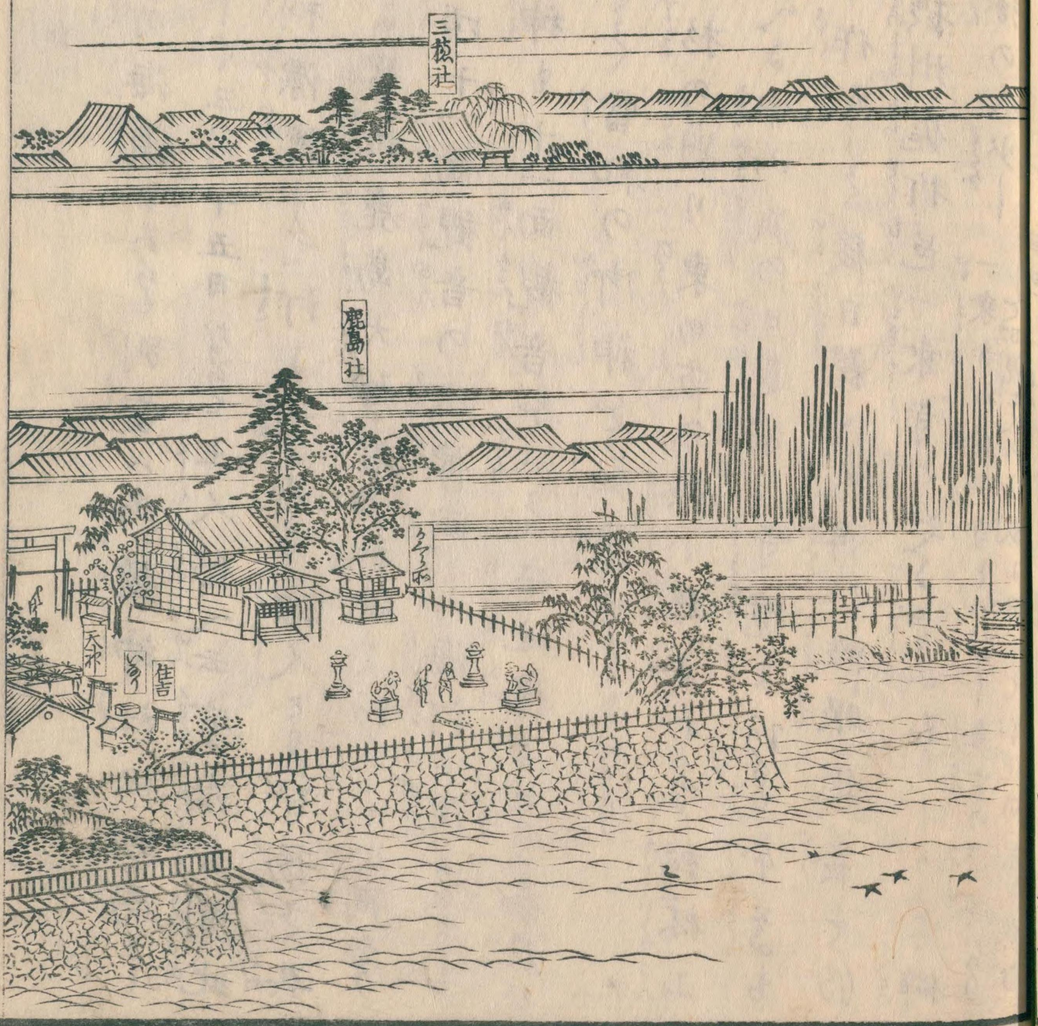
此浦を過ぐあら井といへる所にて云々

江戸にて

芝といふ事の、候夏さしれ　梅翁

御穂神社　同所本芝通りよりも西の横町にあり本芝の産土神にして祭禮ハ三月十五日なりも別當ハ正福寺と号す天台宗にて東叡山に属も傳へ云往古駿河國三穂の海人此浦に来りて住を故に古郷の御神なれをとて文明十一年庚子のとしこゝに當社を勧請せしなり祭神御穂津彦御穂津媛等の二神なりといへり　土俗當社を痘瘡の

御穂神社
鹿嶋神社



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

守護神とし祈願

鹿島神社 同所海濱にあるも別當ハ御穂神社に相同し祭禮も又同しく三月十五日なるも土人傳へ云寛永年間此浦に一の小祠漂流して汀に止るあり漁人ことを揚て其本所を尋るに常州鹿島大神宮の社地にありし小祠なりけるよし又其頃十一面観音の木像同し海汀に流よりもしかハ鹿島明神も十一面観音を以て本地佛とせしなれハ是にことつきて當社の御神を勧請せしとなり

毘沙門堂 金杉の通り東の方の横小路にあり松林山正傳寺といへる中山派の日蓮宗の寺境にあるも本尊ハ傳教大師の作にして後日親上人再ひ點眼供養せしとそ往古ハ摂州梶折邑一乗寺といへる寺にありしかとも僻地にして結縁の人少し 一乗寺ハ金仙寺といひし真言の密場なりしを日親上人の弘教に帰して本化の宗に改む

毎月寅の日貴賤群集して施ひ恭かなりし

金杉 毘沙門堂

奉獻毘沙門天王

国立国会図書館 タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

依て寛文の頃衆生化益の為日栄上人こゝに移し来るとあれ
靈驗感應の著しきるハ寺記に詳なり故に叅詣の貴賤日々に
多く寅日を殊に群集せり正月初の寅日叅詣の人大方ハ芝の神明
宮の門前にて燧石をこゝろゝ帰る輩あり
洛北の鞍馬山の毘沙門天へ正月初の寅日詣する輩日親上人の
燧石を買て家土産とこれを畚ぶしといふこれに準ふといふ
靈驗著し

田中山西應寺　金杉の通りより西の裏にあり門前を西應寺町と呼ぶ浄土
宗にして三縁山に属す支院三宇あり本尊阿弥陀如来
の像ハ慧心僧都の作なりと云傳ふ應安紀元戊申の年明賢
上人草創す明賢上人ハ應永五年戊寅黄鐘十日に迁化す年八十六歳といへり天正の頃大将軍家
當寺に駕を枉させられ寺領御寄附あるしかハ学徒朝夕
の助寛にして学道盛なり又當寺十六世存冏和尚一
宗に碩学にして當時法門の龍象学道の麟鶴なり
されハ大将軍家深く崇敬ましくなるにより台命に
依て一夏の間法幢を建一百餘人の衆僧に宗風の法意を
示すべく念佛三昧他力往生のをしへ日々に大いに弘まり

三田　或ハ御田及ひ箕多に作ると古神領に寄らせし地を御田と書る由古老の説なり

和名類聚鈔云　荏原郡御田云云
武藏國風土記殘篇云　荏原郡御田郷或箕多
公穀三百六十七束假粟百三十九丸貢松竹蔵□
等亦有諸禽允大膳或木工寮云云

按に此地を以渡辺の綱か旧跡とするに誤なるべし或人云此地ハ三田家の
旧領にして三田氏累世こゝに居住す三田家譜に三田三河守其子駿河守
綱勝武州三田に住す代々綱といふ字を名とす依て後人渡辺の綱
混し交へて誤まる歟と云々渡辺系図に云源次充武藏國足立郡箕田
郷に配せらるとありて三田とするものなし三田箕田同訓なる故に混雑し
てかゝる附會の説をハまうけたりしなるべし鵞峯文集に箕田園の
記と号するものありて此地を渡辺綱か旧跡とせらる其文ハこゝに畧せり
永禄二年小田原北条家の所領役帳に大田新六郎知行の内に三田内壽
楽寺分同箕輪寺屋分又島津弥七郎知行三田坂間分及中村平次左衛門
知行三田高福寺分本住坊寺領に同所にて惣領分の地等を配すと見
えたり

綱坂　同所松平隠岐侯と會津家との藩邸の間を寺町へ

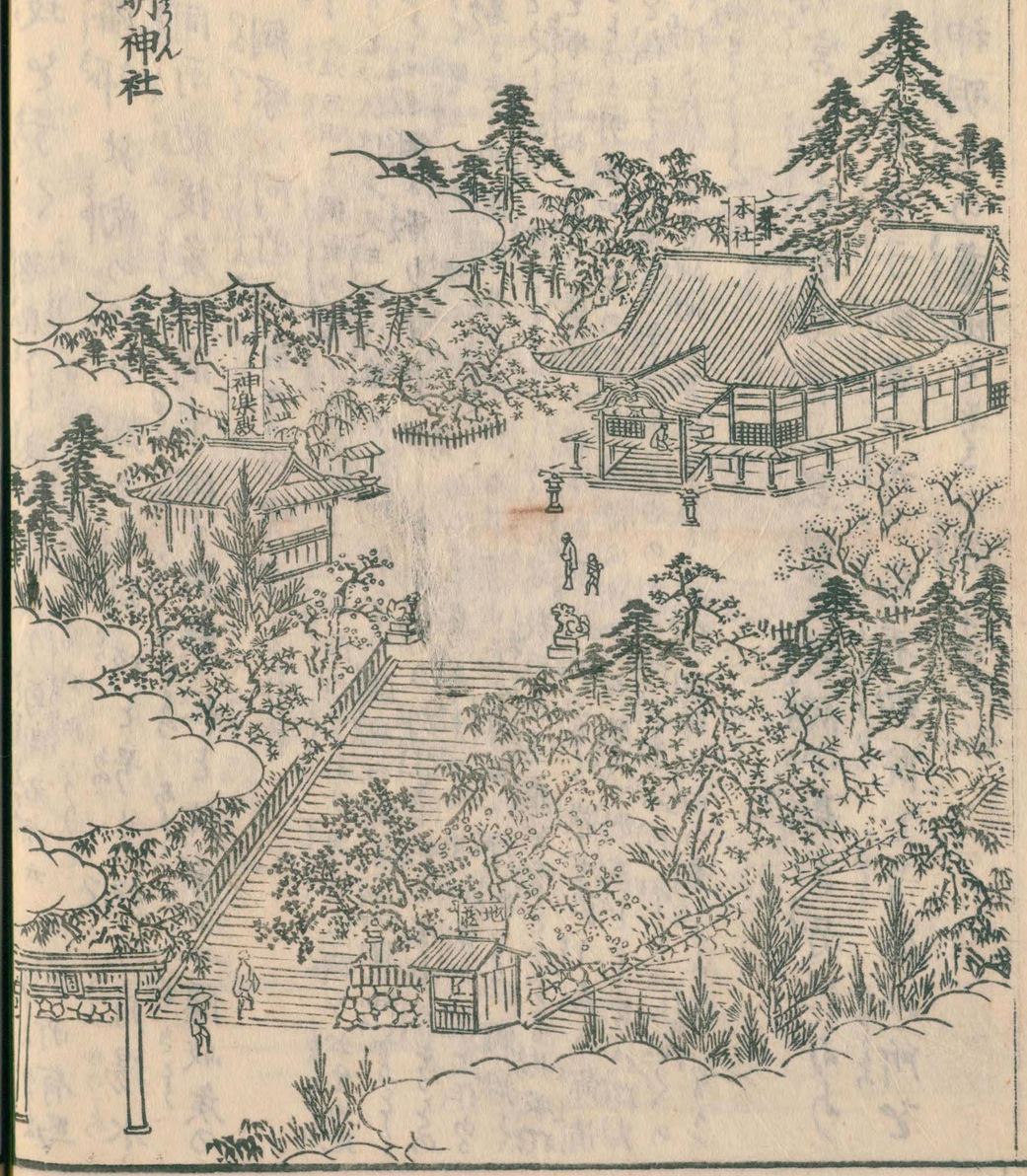
小山神明宮

下る坂を号く 惣鹿子に渡辺坂とあり 菊岡沾涼云 此所ハ箕田武蔵守の居城跡なりと 又同所有馬家の藩邸北南の坂を綱ゝ手引坂と号く綱ゝ産湯水と云ハ同所肥後侯の園中綱ゝ駒繋松と称するハ隠岐侯の藩邸綱塚ハ同所功雲寺の境内にあり

按に窪三田に綱生山當光寺といへる一向派の寺あり渡辺の綱ゝ出生の地なりといひ傳へ又三田八幡宮の神躰をも渡辺の綱ゝ守護神なりとしまへく此辺綱に縁あるものゝ多し會津家の別荘も綱ゝ塚と称するものありて塚上の松を懐古松と号けられ鶯峯先生の箕田園の記を作らる其畧に云く武蔵國荏原郡渋谷荘箕田邑ハ源綱ゝ陳跡なり綱老仕をうへし此所に終るまでしより已来数百の星霜を歴といへども其塚存せ塚上に松を栽て遺跡を標せ則是壮氣いまに散せず千歳の餘情あるものゝ明暦四戊戌の夏會津源公此地を賜ひ別荘としまふ其塚を存するハ蓋その勇を取り古の士を尚ふ俄と云かくの如く記されたること此地ハ箕田にあらず前の三田の条下に詳なり照合せくべし

小山神明宮 同所有馬家と黒田家の間小高き所にあり神躰ハ雨寶童子別當ハ天台宗不動院と号ず此所を飯倉神明宮の舊地とするハ誤なり

三田
春日明神社

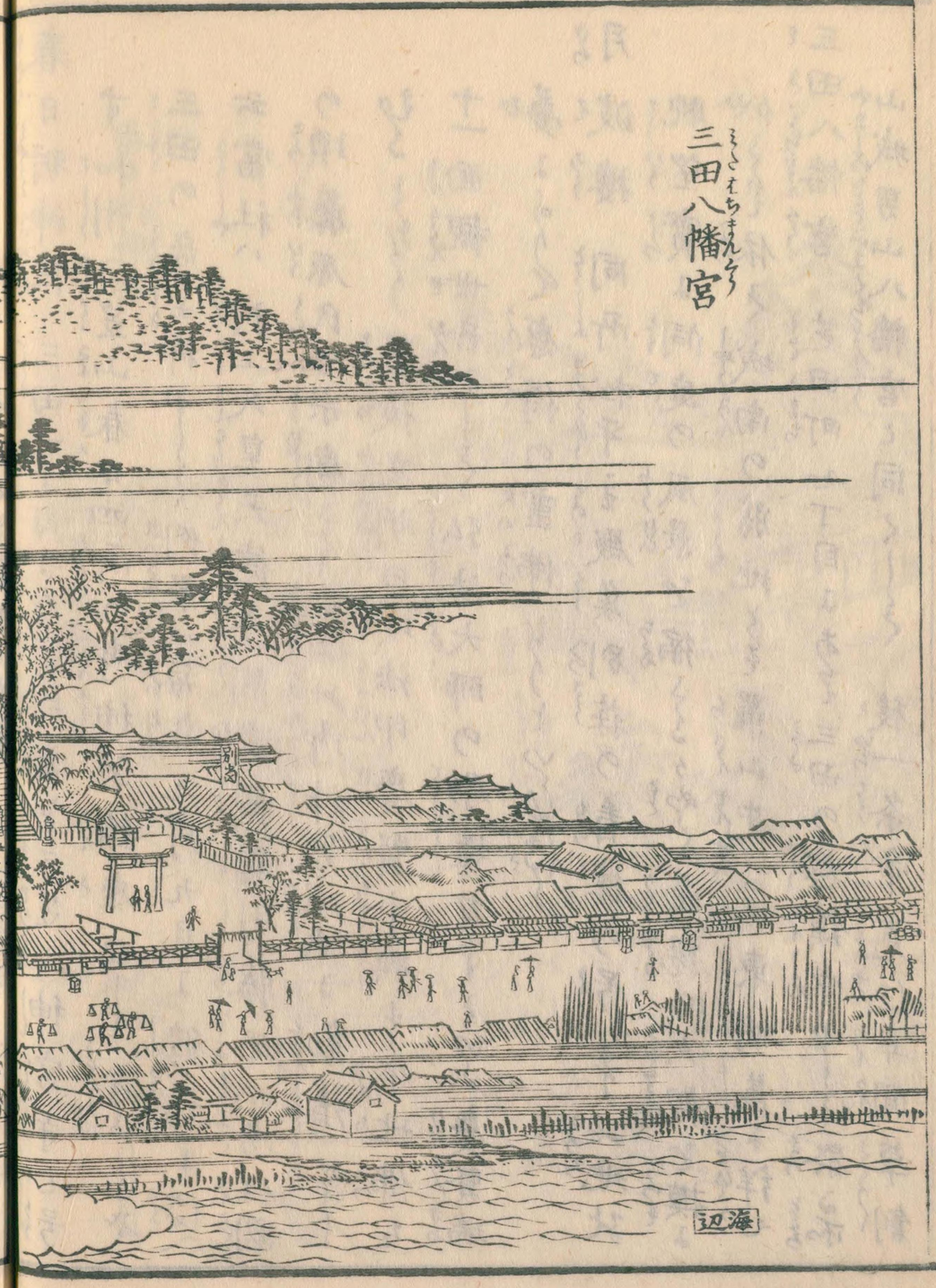


春日明神社　三田一丁目にあるも別當を三笠山神宮寺と号す和州三笠山春日四所の御神を鎮座なしまるとぞ三田の産土神にして例祭ハ毎年九月九日に修行を傳へ云當社ハ村上天皇天德年間武藏國司藤原正房任國の頃藤原氏の宗廟たるなるに此御神を此地に勸請せしむるとなり其後文明の頃法印慶賢中興を本地佛を十一面觀世音にして弘法大師の彫造なるといふ慶賢瑞夢によりて感得の靈佛なりといひ傳ふ

月波樓　同所松平主殿侯別莊の看樓の号なり此地孔眺望實に洞庭の風景を縮たるうゑく岳陽の大觀を摸に似たるも依て城南の勝地とも羅山先生の東明集に詳之

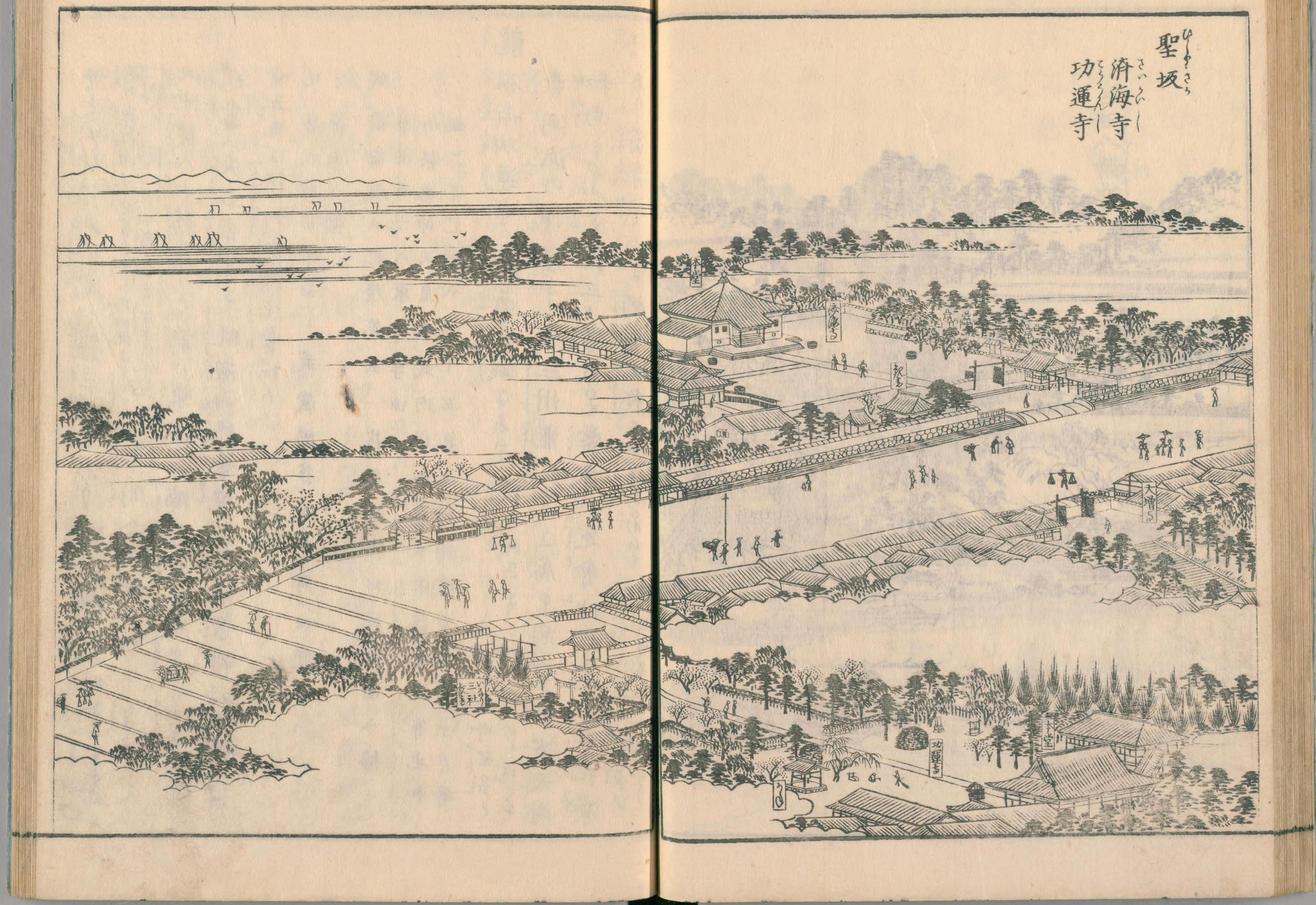
三田八幡宮　芝田町七丁目にあるも三田の惣鎮守にして祭る所山城男山八幡宮と同くして後一条帝寛仁年間草創

三田八幡宮（みたはちまんぐう）



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

聖坂
済海寺
功運寺



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57

ガラス使用

もとゝひ傳ふ旧地ハ窪三田にあり（土人云當社ハ延喜式の神名記及ひ武蔵風土記等の書に載る所の薭田神社是なり今も其旧地に一社あり窪三田八幡宮と称す）正保年間今の地へ移しなるといへり此地後ハ山林にして前ハ東海に臨む故に風光秀美なり別當ハ天台宗にして眺海山無量院と号し祭禮ハ隔年八月十五日に修行を放生會あり

延喜式神名帳云　武蔵國荏原郡御田郷
薭田八幡

武蔵國風土記殘篇云　荏原郡御田郷稗田八幡
圭田五十八束三字田
所祭應神天皇也武内宿祢荒木田襲津彦等也和銅二年己酉八月十五日始行神禮有神戸巫戸等

龍谷山功運寺　同所聖坂にあるも聖坂とハむかし此地に高野聖多く住て開きたりし坂なれハかく云とそ曹洞派の禪窟にして三州龍門寺に属を開山を黙室天周和尚といふ支院三ヶ寺あるも當寺ハ定會地にして所化寮あり當寺境内に綱塚と称するものあるも綱ゝるゝハ前の三田及ひ細坂の条下に詳なり

周光山濟海寺　聖坂の上道より左側にあるも浄土宗にして京師智恩院に属を上古ハ竹柴寺と号して巍々たる真言の古刹なるもしか中古荒廢に逮ぶ依て法誉上人念無和尚中興を（その庭海岸に臨むて沖より目當の燈籠あるも）當寺庭中の眺望ハ實に絶景なるも房總の群山眼下にありて雅趣をくるかたし朝夕に漂ふ釣舟ハ沖に小く暮て數點の漁火波を焼かゝ疑ふる羣芳發して緑陰深く風露爽にして氷霜潔し四時に觀をあらしめて風人の眼を凝しむる一勝地なるも月の岬といふを此辺の惣名なり

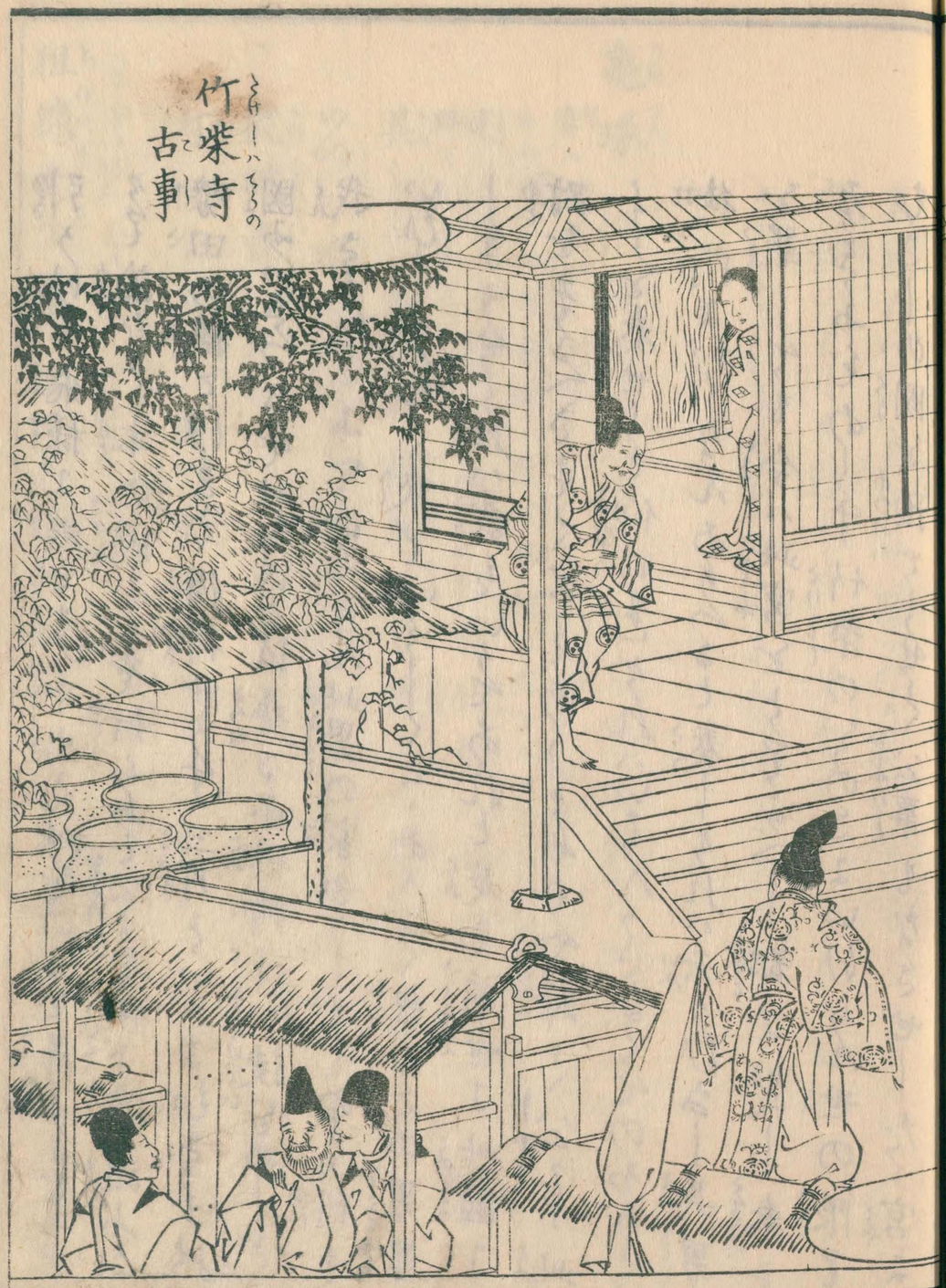
竹柴寺舊址　濟海寺と同隣の土岐侯の邸地其舊跡なりといひ傳ふ（山岡明阿云按に今の地ハ海辺にて此寺にて此寺にてあらハ昔ハ外にありしを後にこの所へうつせしなるへしと云々）

更級日記云
今は武蔵國になりぬ殊にをとしきあるもまゝ遠も所なる

白く波もなくこひちの様にて紫生と聞野も蘆荻のこ
高く生て馬に乗て弓をくる末見えぬと高く生茂りて
中を分行に竹柴といふ寺あり遥にいくさろうぞいふ
所に樓の跡礎なとあるいうなる所そと問ハ是をいやしへ
竹柴といふさうなり國の人にありけるを火焚家乃火
焚衛士にさし奉りたるに御前の庭を掃とて
なぞや苦しきめをみるら我國に七川三つ造り
居たる酒壺にけし渡しこなしたえの瓢の南風吹ハ
北に靡き北風吹ハ南になひき西吹ハ東に靡き東
吹ハ西になひくを見てかくてあるよと獨こちつふやき
けなを其時の帝に御むすめいみしうかしけうま
そまふ只獨り御簾の際に立出ぬひて柱に寄かく
ゆくて御覽するにこれをのこかく獨こけ伏いぞ

哀にいうなる瓢のいうに靡なんといみしう床しく
おほされけるは御簾を押明てあのをのこあちよれと
めしけれハかしこまりて高欄のつゝに叅りたるけるは
云つる事今ことかへて我にいひて聞せよと仰られけれハ
酒壺の叓今ことうへり申けれハ我ぬくいきて見せよ
さいふゆうありと仰られけるはかしこく恐しぞ思ひ
けれとさるへきにやなりけんおひなてまつりて下るに
便なく人追來らんと思ひて其夜勢多の橋にりと
に此宮を居てまつりて瀬田の橋をひとまたうなる
こほちて夫を飛越て此宮伏かきおひ奉りて七日
七夜といふに武藏國にいきけきにけり帝后御子
うせぬひぬとおほしまとひてとめぬふにむさしに
國の衛士のをのこなんいぞかうもしさものを首に

竹柴寺古事



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57

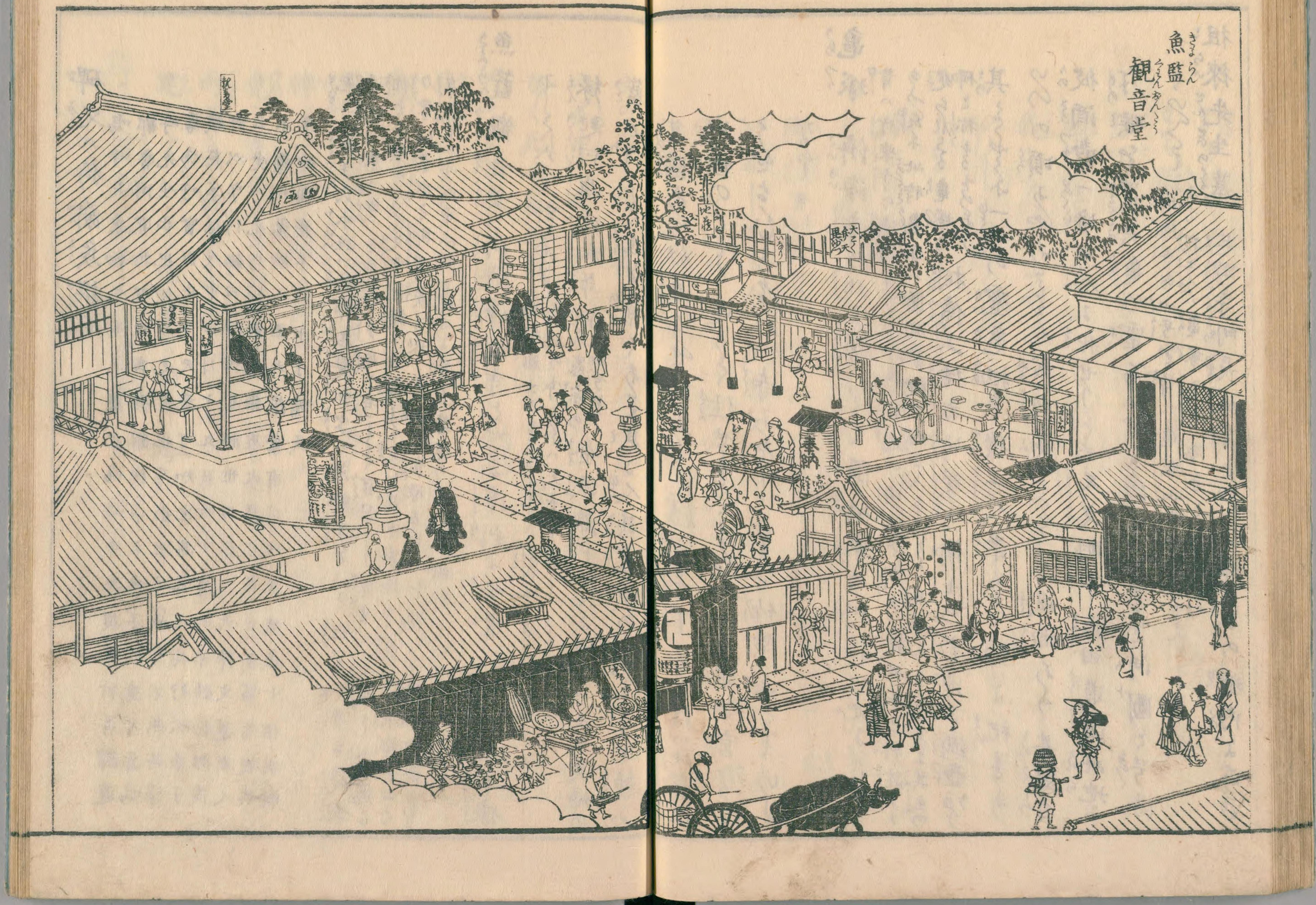
ガラス使用

引うけて飛様に逃さると申出て此をのこを尋るにならず
なを論なく本の國にこそ行らめと公より使下りて追ふに
勢田の橋こほまて得行ゆらす三月といふにむさしの
國にいきつきて此をのこ試尋るに此御子公使をめして
我さるへきにやありけん此男の家ゆかしくてゐて行と
いひしかはゐて來りしくこゝあかよく覺ゆこの男罪
しきうせしれは我もいかてあれと是も前世に此國に
跡をそるへきすくせとありけめたや歸て公り此
よしを奏せよと仰らまけれはいたんかたなくてのありて
御門にかくなんありつると奏しけれは云うひなし其男
を罪しても今は此宮をとりてのへし都にかへし奉る
なきにをあらす竹柴のをのこにいけらん世の限り
むさしの國を預さしせて公事もなさせしたて宮に
其國あつけ奉らせ賜ふよしを宣旨下りけれは此家試
内裡のことく造りて住せまてまつりける家を宮なと
うせなひにけれは寺になしてるを竹柴寺といふ
なり云々

亀塚 済海寺の北に隣りて隠岐家の別荘の地にあり
昔は竹柴寺の境内なりしを御開國の頃地を割て隠岐家の別荘に
なるに此時亀塚は隠岐家氏の内に入りとて其塚のうちにいらに其主の
建られる亀塚の碑と称するものあり相傳ふ往古竹柴の衛士の宅地に酒壺なり
其ことに一つの靈亀栖り後土人崇めて神に祀まつり
いつの頃にやあるけん或時夜ことにうち風雨あり其翌日
彼酒壺一堆の石に化せりと云又文明中大田道灌此地に
斥候を置其亀の靈あるをこゝろしてこれを河圖と号ゆ
といへり 済海寺の山号を昔は亀塚山と唱へしとて今も土人は亀塚の済海寺と唱へり

祖徠先生墓 三田寺町長松寺といへる淨家の境内にあり

魚籃観音堂（ぎょらんかんのんどう）



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57

ガラス使用

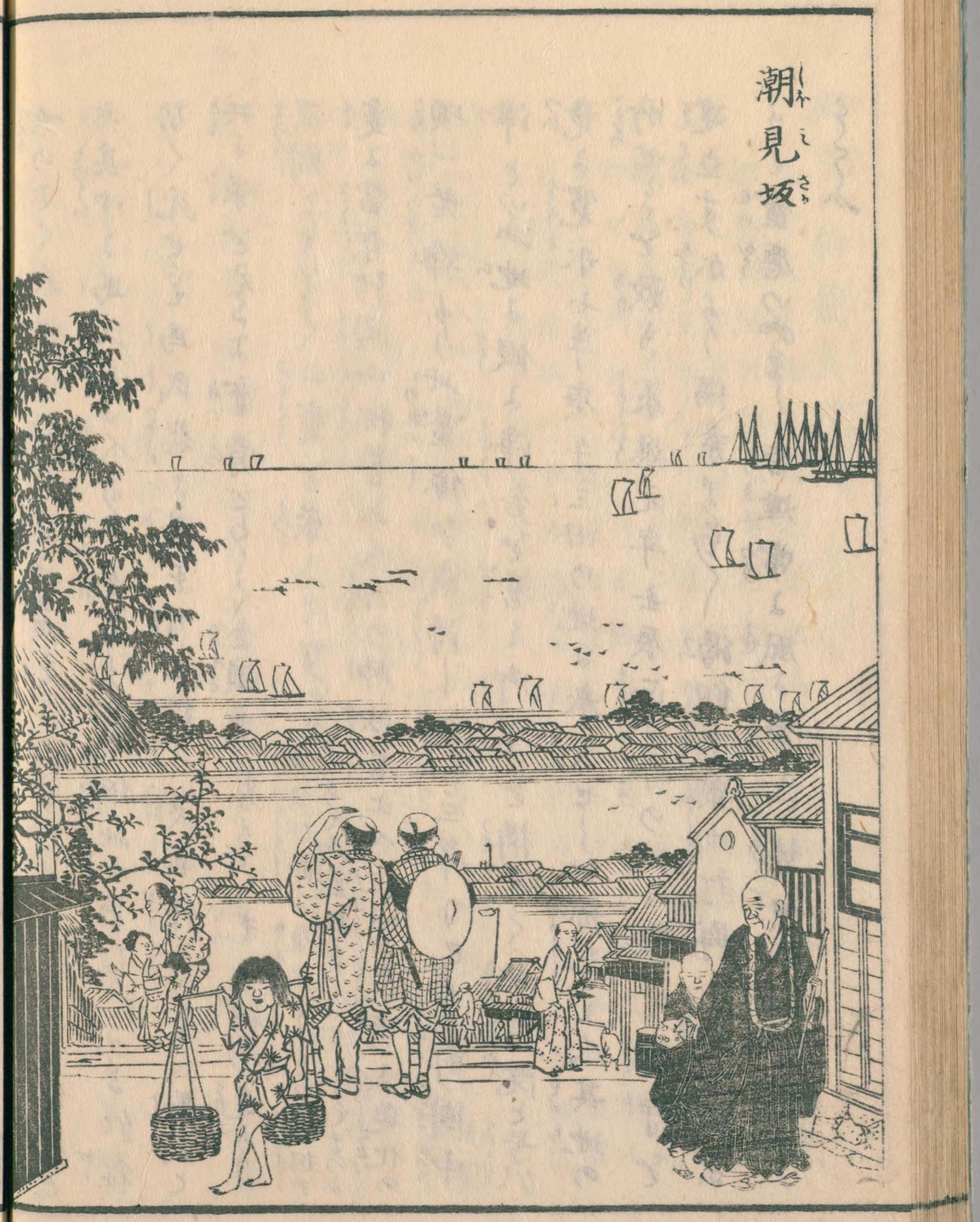
碑文ハ猗蘭侯撰を

嗚呼夫東物先生之墓也嗚呼先生復學於古歸道鄒魯博究物理立言修辭德崇名垂不朽莫大焉嗚呼先生出也如日之升也乃影之及無所不照其朦焉嗚呼實出先生天意可知也其爲人其行狀弟子識矣享保戊申正月十九日六十有三卒姓物部茂卿以字行銘曰洋洋聖謨世用惑久天降文運斯人云受乃化乃弘徽猷維厚大業已成日新冨有瑕其不壽天奪斯人匪天維奪有司列辰嘻我小信瑕能孚神盛德不朽永于牖民

先生ハ荻生氏本姓ハ物部名雙松字ハ茂卿字を以て行ハる一号を護園通称ハ惣右傍つと云父ハ方庵と号して官医より先生父に従て南總に住を五歳ゆしく文字を識十五歳よく文を属を家極て貧しく東都に出て力学に業成て柳澤侯の挙に遇ひ食禄五百石を賜ひ編修惣裁とある享保十三年戊申正月十九日に卒を著述の書八十餘部といふ

魚籃觀音堂　同所淨閑寺といへる淨刹に安置に本尊ハ木像ゆしく六寸計あり面相唐女のことくゆしく右の御手に魚籃を携左の御手にハ天衣を持しこまへり

縁起曰唐元和年間憲宗の年号なり金沙灘といへる地に一人の美婦の籃を持して魚を鬻くあり見る人其容貌の麗しきを競ふ女の云く我性佛経を悦ふ若夫に通せむ人あらハ夫とせんと云其中に馬氏なる人あり是をよくを依此女をむかへるに程なく死せり馬氏悲に堪ず日を経て後異僧来りて馬氏と共に塚をかゝるに靈骨ことくく金鎖ゆくなりて光を放つ是より其國こそつまく三寶を崇ふとなむ初金沙灘に應化ましまし妙相をあらめて魚籃觀音とハ号けてまつる爰に當寺を開山称誉上人自の師法誉上人肥州長崎に遊化の頃一老婦より此靈像を感得し元和三年丁巳豊前國中津といふ地に假に淨舎を営て御座を構へて魚籃院と号に竟に寛永七年庚午三田の地に奉安せしを称誉上人其地の所せきを歎き兼應元年壬辰正に今の地に移し當寺を建立す尓より緇素まもく渇仰し衆人打群て歩を運ぶよりて靈應いやまし香煙常に風に靡き梵唄うたゝ林にこゝふ


潮見坂

潮見坂　聖坂の南伊皿子臺町より田町九丁目へ下る坂をいふ

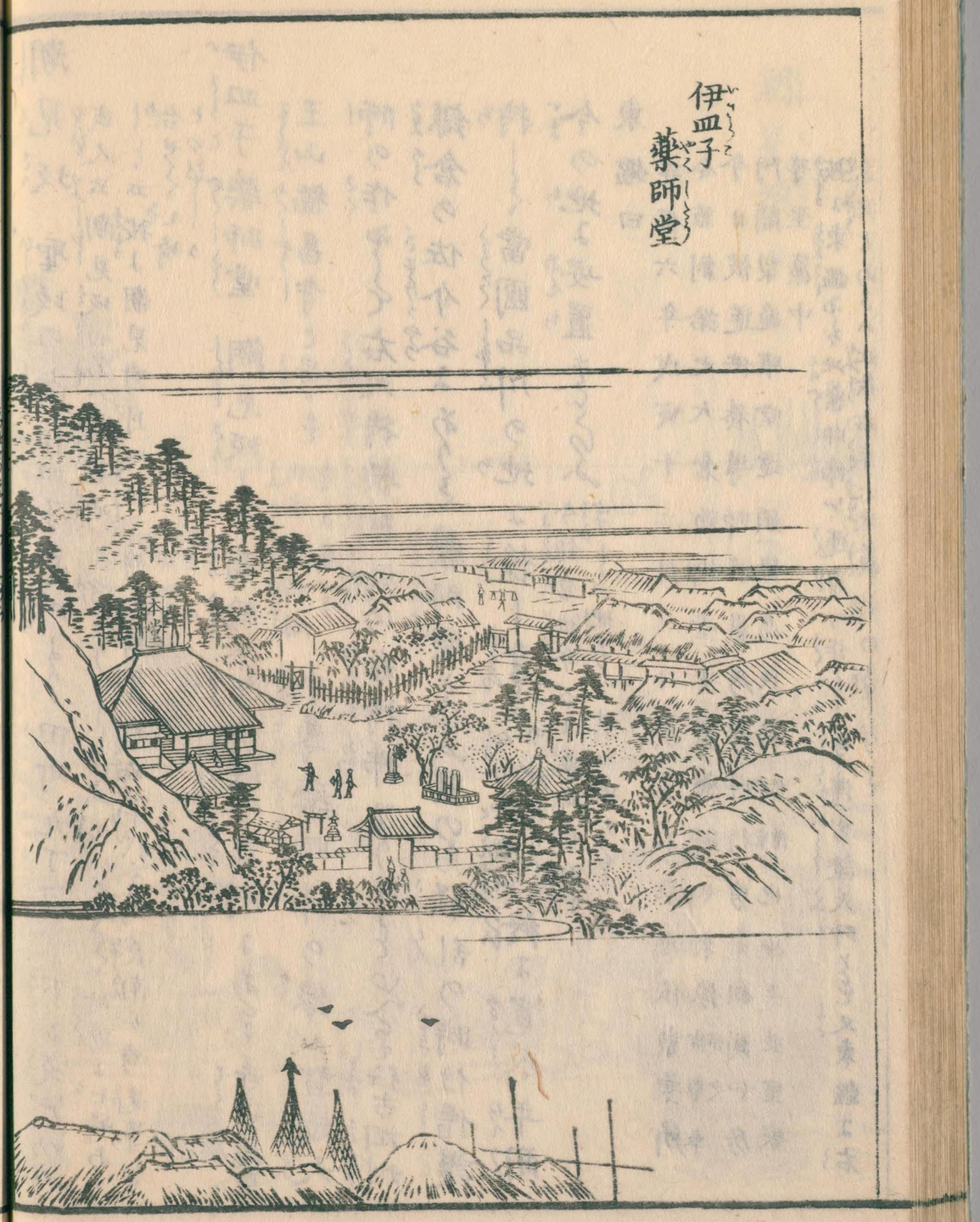
或人云潮見坂旧名ハ潮見崎と呼たりしといふ古ハ此辺ニ七崎ありしと云按ニ潮見崎月岬袖ヶ崎大崎荒蘭崎千代ヶ崎長南ヶ崎是等を合せて七崎といひしか

伊皿子藥師堂　潮見坂より高輪へ下る坂の左側にあり寺を醫王山福昌寺と号す天台宗城琳寺に属す本尊藥師佛の像ハ智證大師の作にして右大將頼朝卿の念持佛なりしとゝ往古相州鎌倉の佐介谷にありて藥師堂といふ其のち騒乱の時住僧護持して當國品川の地に移しなるの地なり今の御殿山終に寛永年間今の地に安置せしといふ今鎌倉佐介谷に藥師堂跡と字する地あり其旧跡なり

東鑑曰

建保六年戊寅十二月二日庚子右京兆依靈夢所令草創給之大倉新御堂安置藥師如來像雲慶奉今日被遂供養導師莊嚴房律師行勇兇願圓如房阿闍梨遍曜堂達頓覺房良喜若宮供僧也施主並室家等坐簾中

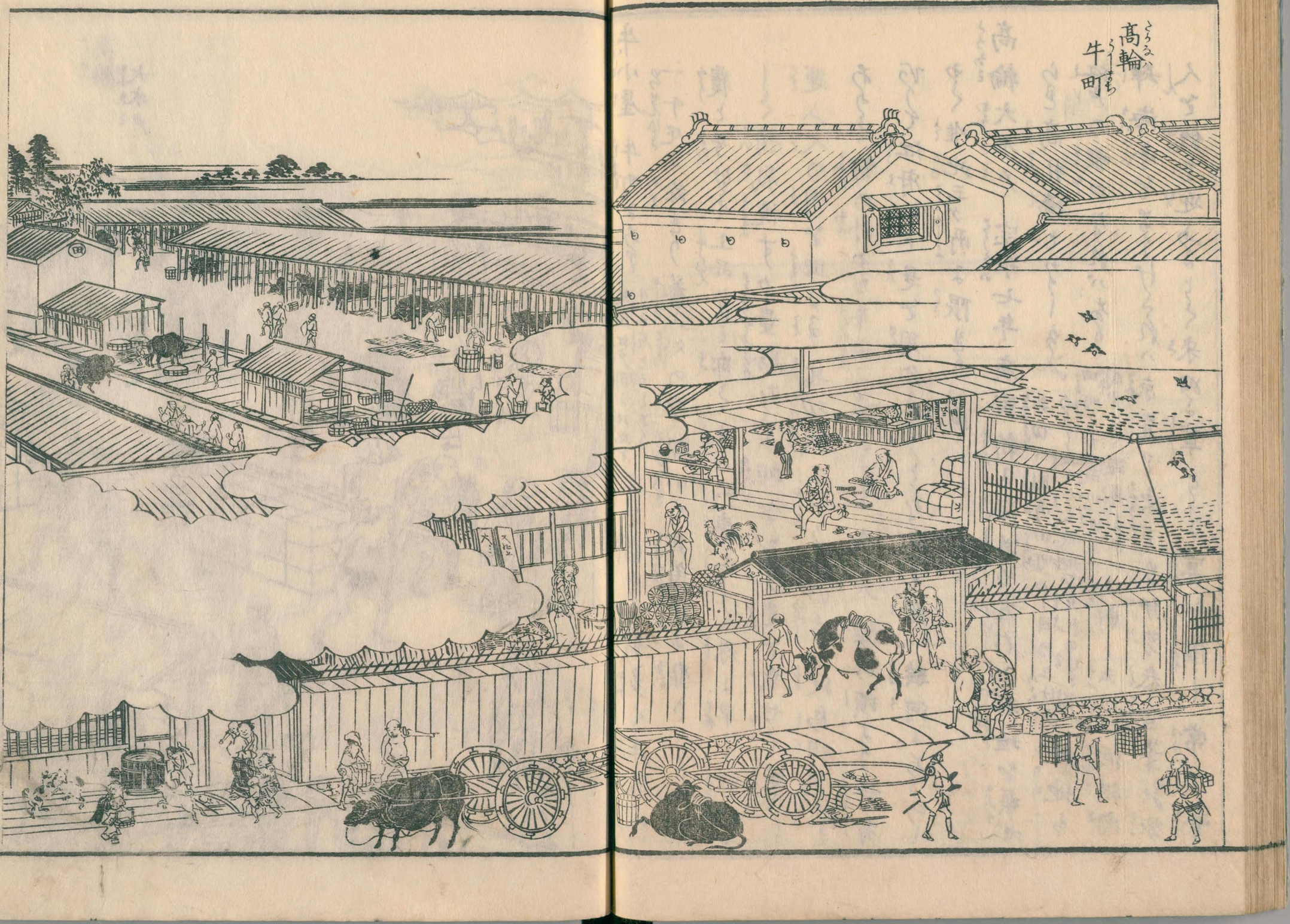
按ニ東鑑にハ此藥師佛を運慶の作とし寺傳智證大師とす又東鑑に右京兆とあるハ北条右京大夫義時のことなり



牛小屋　牛町にあり　延宝江戸図に此地を牛の尻と云とあり　牛を畜する家多く牛の數一千疋に餘もり養ふ処の牛額小く其角後に靡きたるを藪覆と号けて上品なれば都て牛ハ行事正しく殊に早し形婉にして精氣撓す力量勝たるに軛をかゝ重を乗せて遠きに運ふ人の用を助るゝ其功誠に少からに古ハ淀鳥羽にのみあれて都の外にて牛車なりしに所入國の頃より許宥ありて江府にも是を用ゆるゝとなれども餘ハ駿河にあるのみにて唯此三ヶ所に限りとせ

高輪大木戸　宝永七年庚寅新に海道の左右に石垣を築せられ高札場となしたるに　其初ハ同所田町四丁目の三辻にありし所に今も彼地を元札の辻と唱ふ　此地は江戸の喉口なれバなり　田町より品川迄の間にして海岸なれば七軒と云辺ハ酒旗肉肆海亭をまうけられハ京登れ東下り伊勢参宮等の旅人を餞れ迎ふるとて来ぬる輩ここに宴を催し常に繁

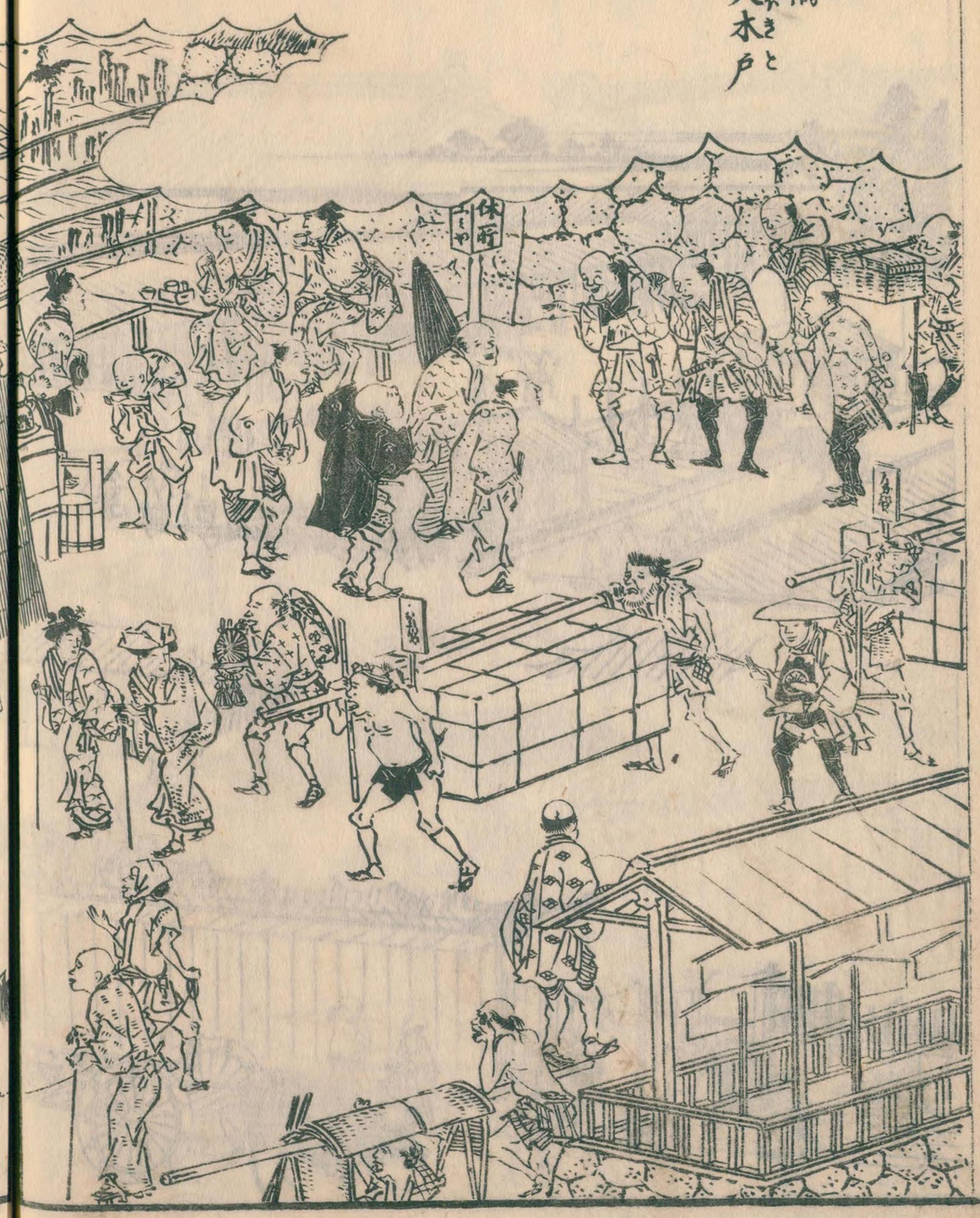
高輪牛町（たかなわうしまち）



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57

ガラス使用

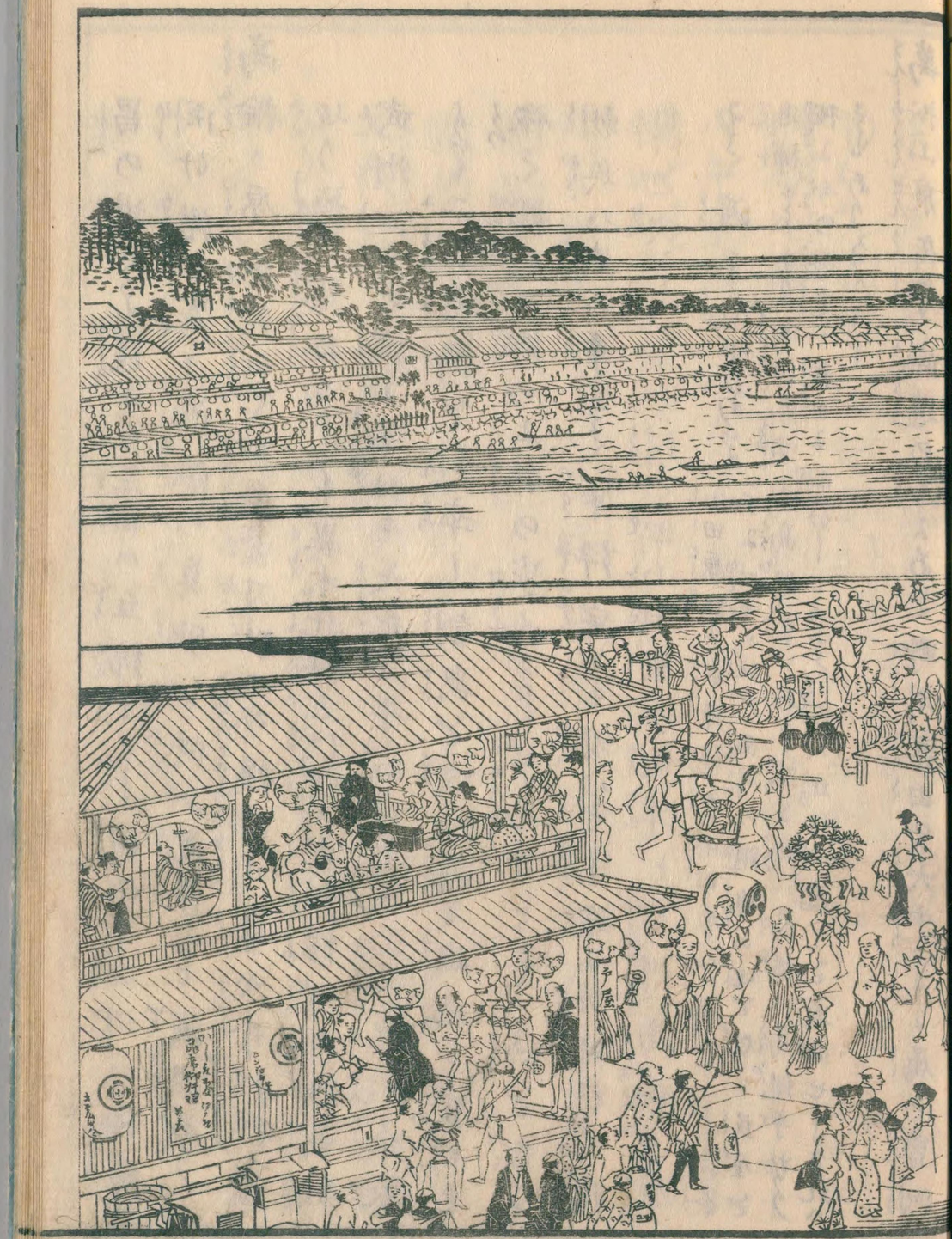
高輪大木戸



緑海旌郊関高阡
上路間早朝平吐
日殘霧半含山遠
近征帆出東西驛
馬班長安從此去
萬里幾人還
南郭

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

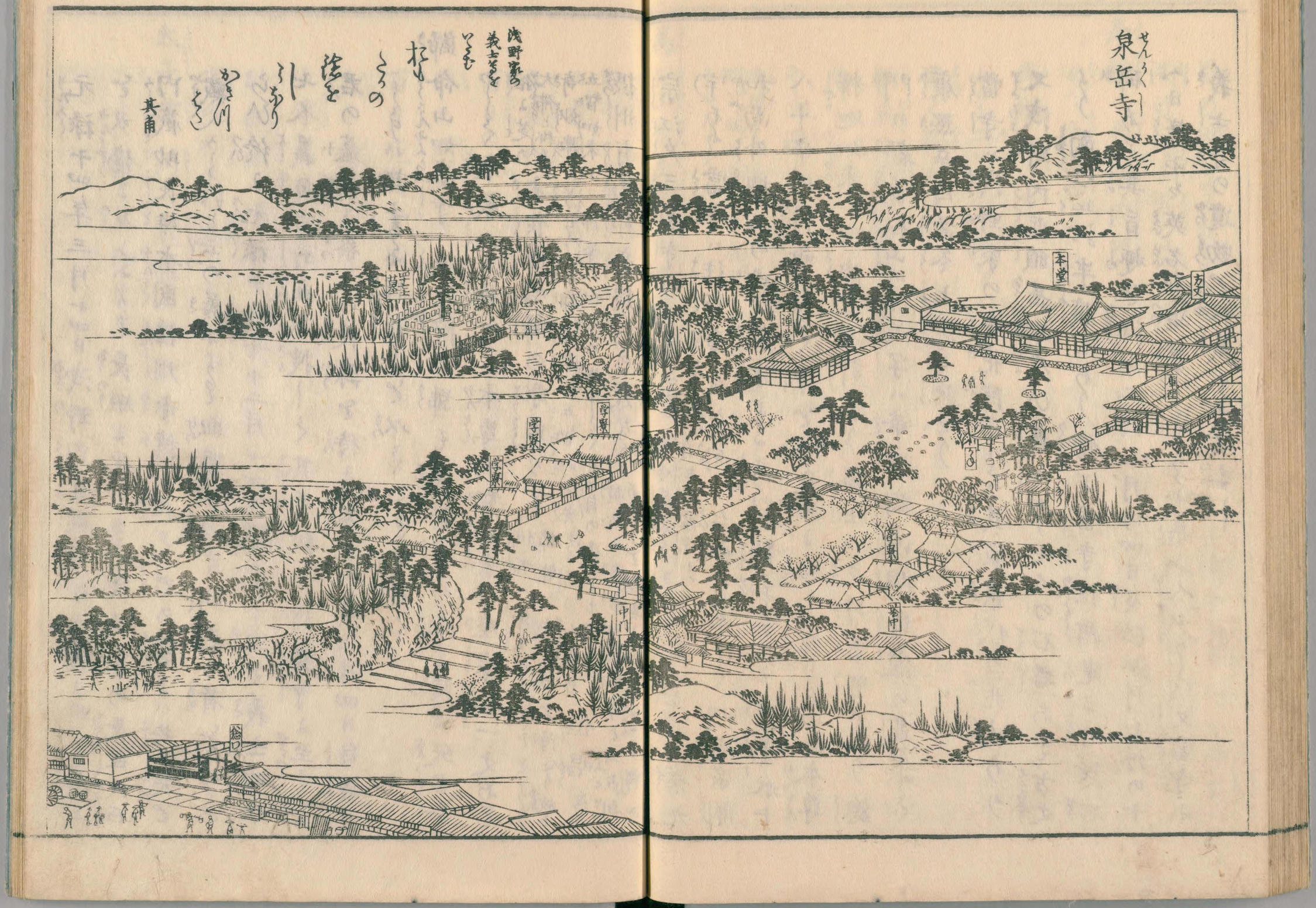
高輪海邉七月二十六夜待



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57

ガラス使用

昌の地にて後ゆゑ三田の丘綿々とし前にハ品川の海遥に
開け渚に寄る浦浪の真砂を洗ふ光景なと家興あり
高輪ゟ原　里老云く白金臺及ひ二本榎品川臺大井村杯いふ
辺り迄の惣称なりとそ異本北條五代記に上杉修理太夫朝興
武州江戸の城に居住せ大永四年正月十三日小田原北条家
よりも二万餘騎を引卒し朝興を攻んなに彼地を發向せ
依て稲毛六郷の上杉の家人より早馬をもてく急を告る
朝興ハ俄の事にて軍評定にも及ハて中途に出迎ひて勝
負を決せへしと対て出小田原の先陣と品川高輪ゟ原
にて渡せ合とあり　小田原記に永禄信玄小田原を攻むとき海条下に一手ハ江戸品川の繩嶋の辺を焼て民屋を
追捕せとあり又江戸咄に高繩手とあり然る時ハ高繩ハ高繩手なり
按に今の海道ハ後世に開けしものにて古へハ丘の上通りを通路せしなれハ
さもありなんかし
萬松山泉岳寺　海道の右にあり野州冨田の大中寺に属せ曹洞
宗江戸三箇寺の一員にて　橋場總泉寺芝青松寺當寺にて坊舎三宇学寮九
宇あり當寺ハ往古慶長年間台命を奉して門庵宗關
和尚外櫻田の地に創建せる所ゟ禪刹なりて後寛永十
八年辛巳再命ありて寺を今の地に移したりといふ本尊
釋迦如来ハ座像二尺計あり脇士ハ文珠普賢なり總
門の額萬松山の三大字ハ華僧閩沙門道霈の書にして
康熙辛酉孟冬上浣と記せり
當寺ハ浅野家の香花院にして其家累代の兆域あり
又浅野内匠頭長矩及ひ義士四十七人の石塔あり方丈
より南の丘ゟ半腹にあり傍に當寺住僧建る所ゟ石
碑あり其旨趣を注せ二月三月の四日及ひ正月七月の十
六日等にて英名を追慕してこゝに集ふ人少からず又當寺に
義士等の遺物を収蔵せるゝ多し

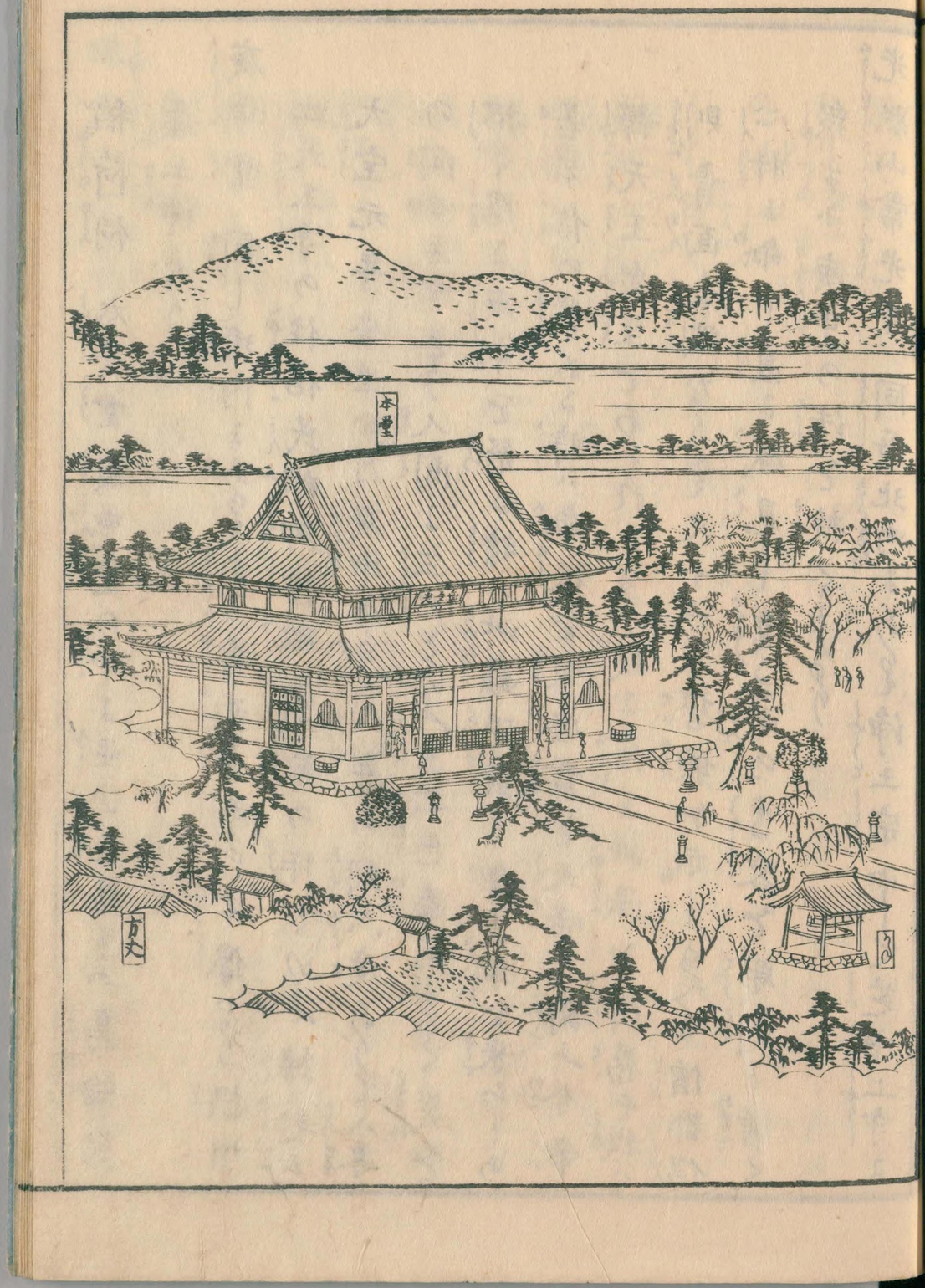


国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

元禄十四年三月十四日浅野内匠頭長矩吉良上野介義英を刃傷に及ぶによりて長矩に死をもふ後其家の長臣大石内蔵助良雄本國播州赤穂に在て君の讐には共に天を戴へからずと云の義によりて血盟を以て同志の者をかたらひ終に元禄十五年十二月十四日讐家に至て義士四十七人義英の所在を捜して其首級を得當寺に至て亡君の墓前に祭るの後誅を待て翌十六年二月四日自殺せしものは諸書に詳なるを以てこれを省く

歸命山如来寺　大日院と號す泉岳寺の南に隣る天台宗にして東叡山に属せり本尊五智如来は座像各一丈あり俗に芝の木食但唱師の彫造なり但唱は佛工にしてことより大佛と称す佛躰を作るに妙を得たり故に奇妙佛と号せり京都鳴滝の五智山に安する所の石像の五智如来十三佛等は但唱の作にして并に自の像をも作れり但唱あり摂州有馬郡高須村の産なり彼所に靈亀山奥勝寺と云古刹ありしを再興して釋迦如来及び自の像をも彫刻し安置せり其母有馬藥師に祈請して是を設く三歳にして魚肉を食せず九歳初て出家す年十五に至て木食但善の弟子となりて夫より後信州檀特山に籠り百日の中に念佛三昧を修得し向の峯に三尊の影向を拜す同國浅間嶽及び南紀の那智山等に籠るなり各百日宛又南海北溟の間を普く回り諸の奇特をみるなり多し終に江戸に下り寛永十二年當寺を開創し五智如来の像を作るといふ三時念佛の勧は但善但唱二代にして絶えて臥龍岡境内堂前北の岡を云形状を以号とす上に天満宮の祠あるなり天神山と呼べり

太子堂　同所旭曜山常照寺といへる天台宗の寺にあり聖徳太子の像は十六歳のそる容にして自作なりといふ元禄年間開板の江戸鹿子といへるものに明暦年間越後守光長卿の陪臣川木八兵衛某故ありて此所に安置しけるとあり



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

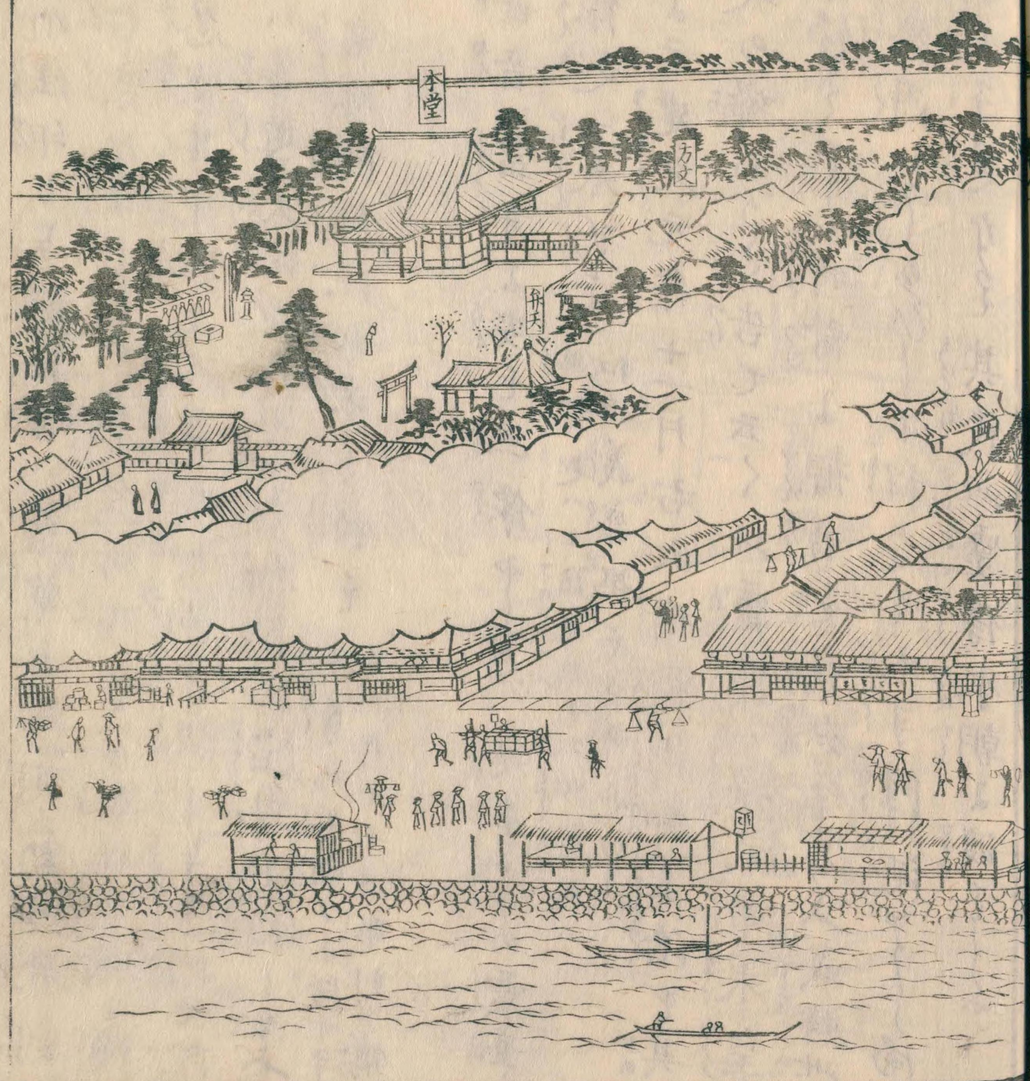
稲荷祠　太子堂　庚申堂の中に並ひ立せまふ高輪ゟ
産土神なり

庚申堂　同し境内にあるも本ゟ青面金剛の木像なり摂州
四天王寺の住侶民部卿僧都豪範の作といふ縁起云
大宝元年辛丑正月庚申の日ハ一年の間六度ありて八専
の間日に中もり人間に三尸といふ三の悪蟲ありて災を
招く然に庚申を祭る時ハ此蟲退散し身に幸を来らしめ
若不信の輩ある時ハ命根を吸悪業を天帝に訴ふ今帝
釋天王衆生をあはれてまふ故に汝に此法を附属も我ハ
則青面金剛なり也又十二の誓願を示しまへり僧都信
心肝に命し直に感見しなる所の爲容を彫刻し普く
衆生に庚申の法を授くとなり

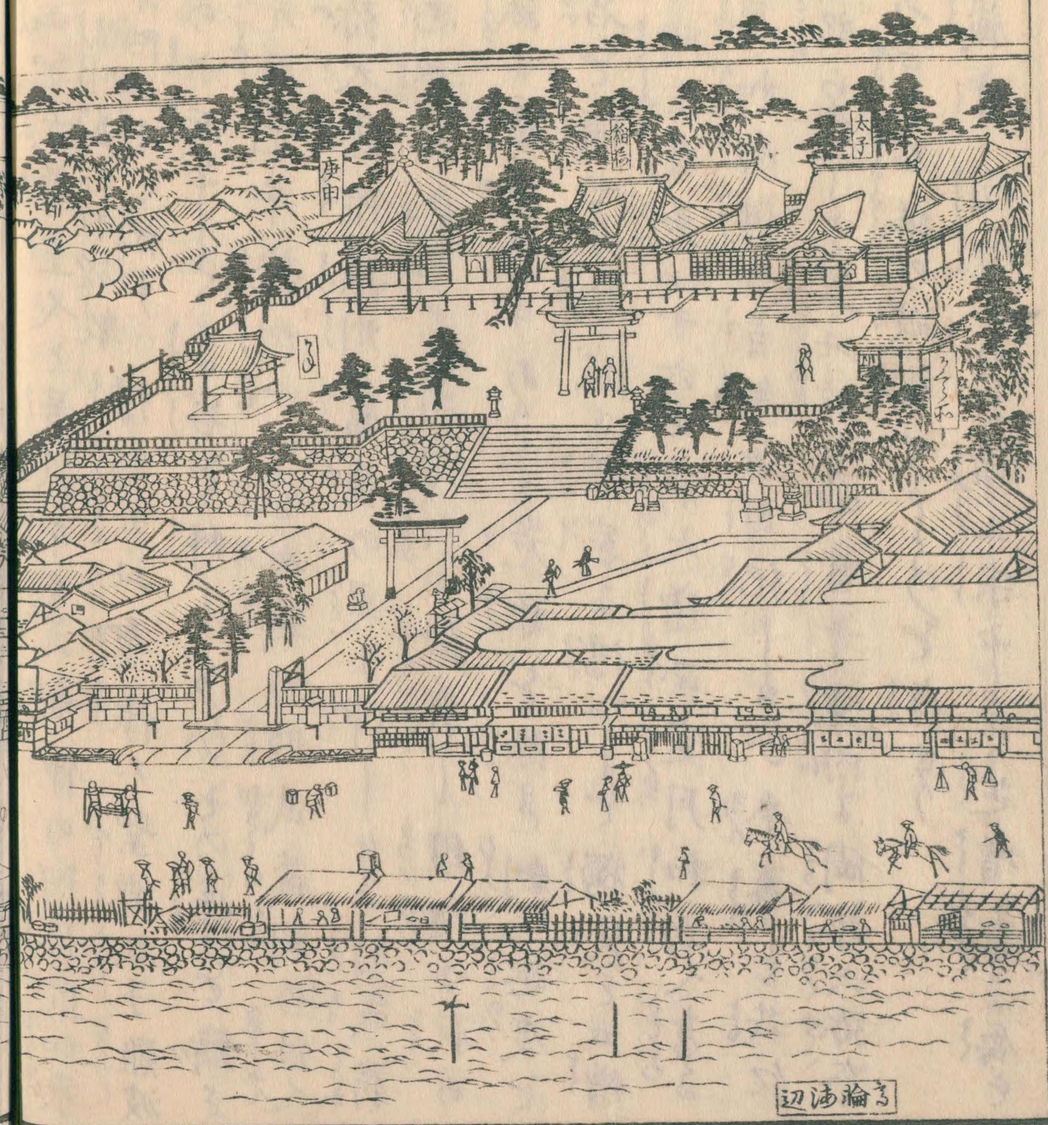
光照山常光寺　同所北町にあるも浄土宗にして芝増上寺に
属も開山を大誉上人と号に本ゟハ金像の阿弥陀如来
なり（世に信州善光寺分身の弥陀如来と称す）縁起云此霊像ハ聖徳太子難波
の堀江の水面にして爲容を拝しまひその像を鑄さ
しむ後元暦元年播州一の谷合戦の時武蔵國の住人
岡部六弥太忠澄摂州蘆屋の里に陣しける時或翁
此像を忠澄に受与す忠澄大に歓喜し鎧櫃に収め
出陣も然に霊威のありて危難を除き剰へ忠度を
討て武名を顕せり依代々其家に傳へしを獨夜と云僧
故ありて増上寺第四十六世前大僧正定月和尚へ来る
遂に定月和尚件の旨趣を自記しまひ本尊と共に
當寺に収られしといふ此故にや當寺境内に岡部六弥太
墓と呼ふ古き石塔の破壊せるものを存せり

珠玉山宝蔵寺　同所にあるも浄土宗にして芝増上寺に属も

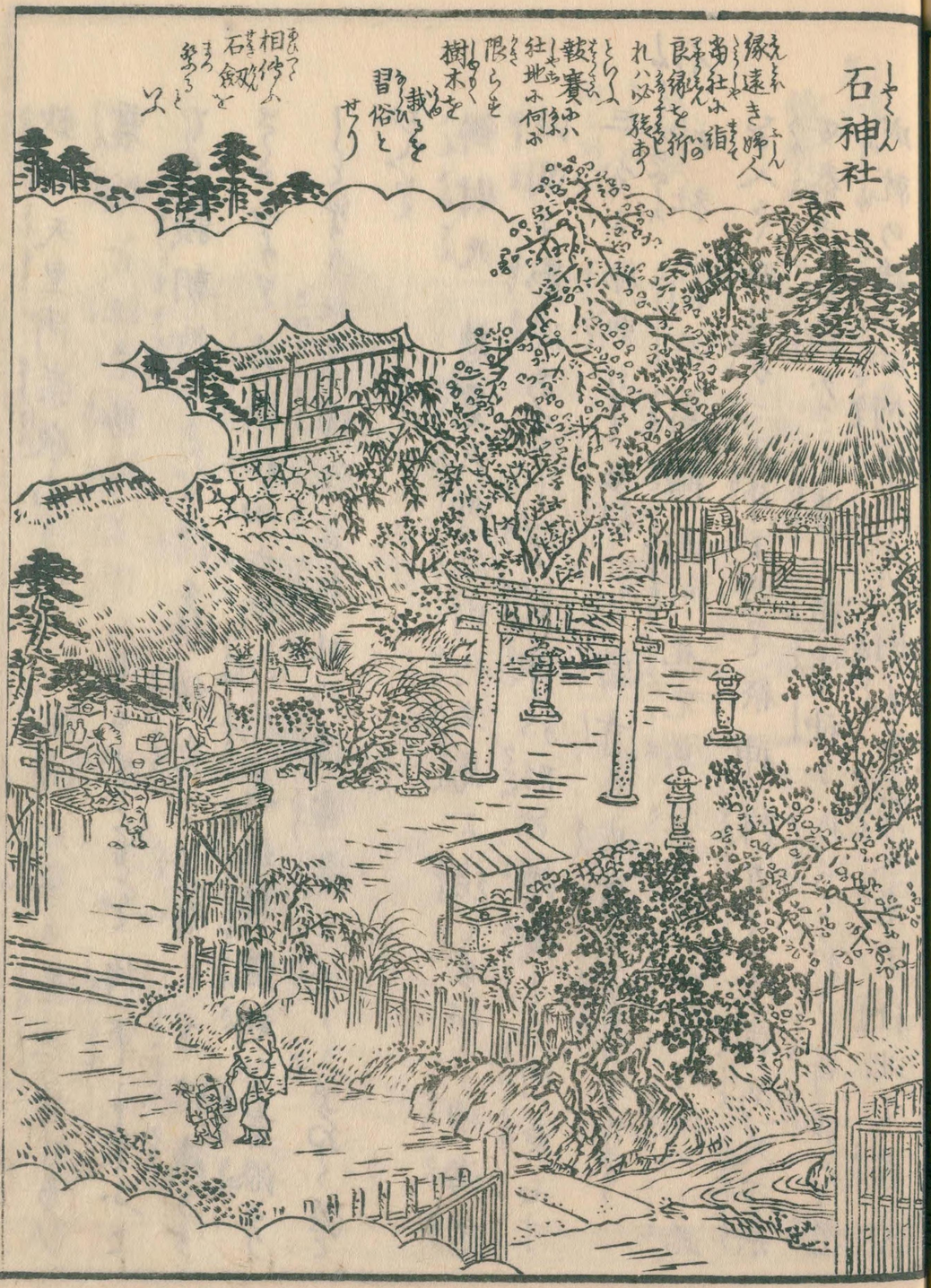
常光寺



太子堂
稲荷社
庚申堂



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用



開山ハ順清法印と号ス往古ハ慈覚大師開創の梵刹
にして天台宗なりしといへるもいつの頃よりか今の宗風に轉
して七世忍空甚光勅上人慧順和尚中興を本尊阿弥陀
如来の像ハ善導大師の作にして御身に宝珠を持しなふ
故に世俗宝珠阿弥陀如来と称を
本尊の背面に永隆元年十一月十七日彫刻と鐫
付て
あるも
子安観世音 當寺に安を画像にして 延喜帝の震筆
なりと云縁起一巻あるも 画縁起ハ土佐光信と云略縁起ハ和田義盛撰する所といふ
縁起略に云建久元年十一月右大将頼朝卿上洛を其
途中一人の婦ありて告て云く此霊像ハ梁武帝未皇
太子ましまさしし時常に観音を祈念しなふ或時此
霊像を感得なしまひしに程なく太子降誕ましまし
せり昭明太子是なるも其後此霊像本朝に渡ましに

石神社

縁遠き婦人
当社に詣
良縁を祈
れハ必張あり
鞍賽にハ
社地に何に
限らず
樹木を
裁るを
習俗と
せり
相傳に
石劔を
鑿る
いふ

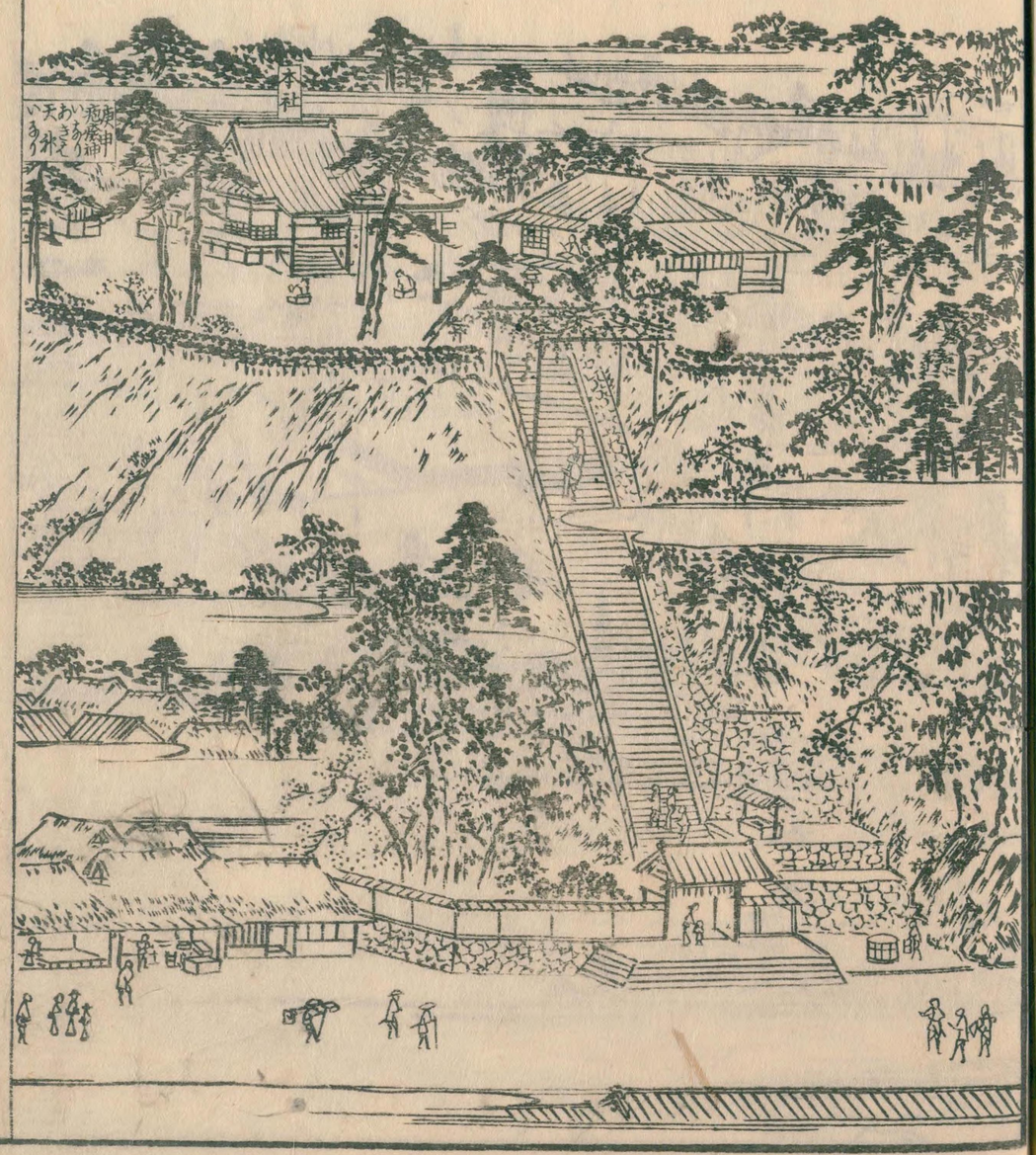
欽明天皇御崇敬あり又　醍醐天皇も尊信なしまひ
震翰を注き縁起を作らせまゝを将軍にたまふと
なり頼朝卿こゝを得まひ鎌倉に安置し為信浅から
さるゆゑ其頃和田左衛門尉義盛再縁起を書添たり
しとなり此靈像鎌倉兵乱の後當寺に迁しまゐらせ
いへる

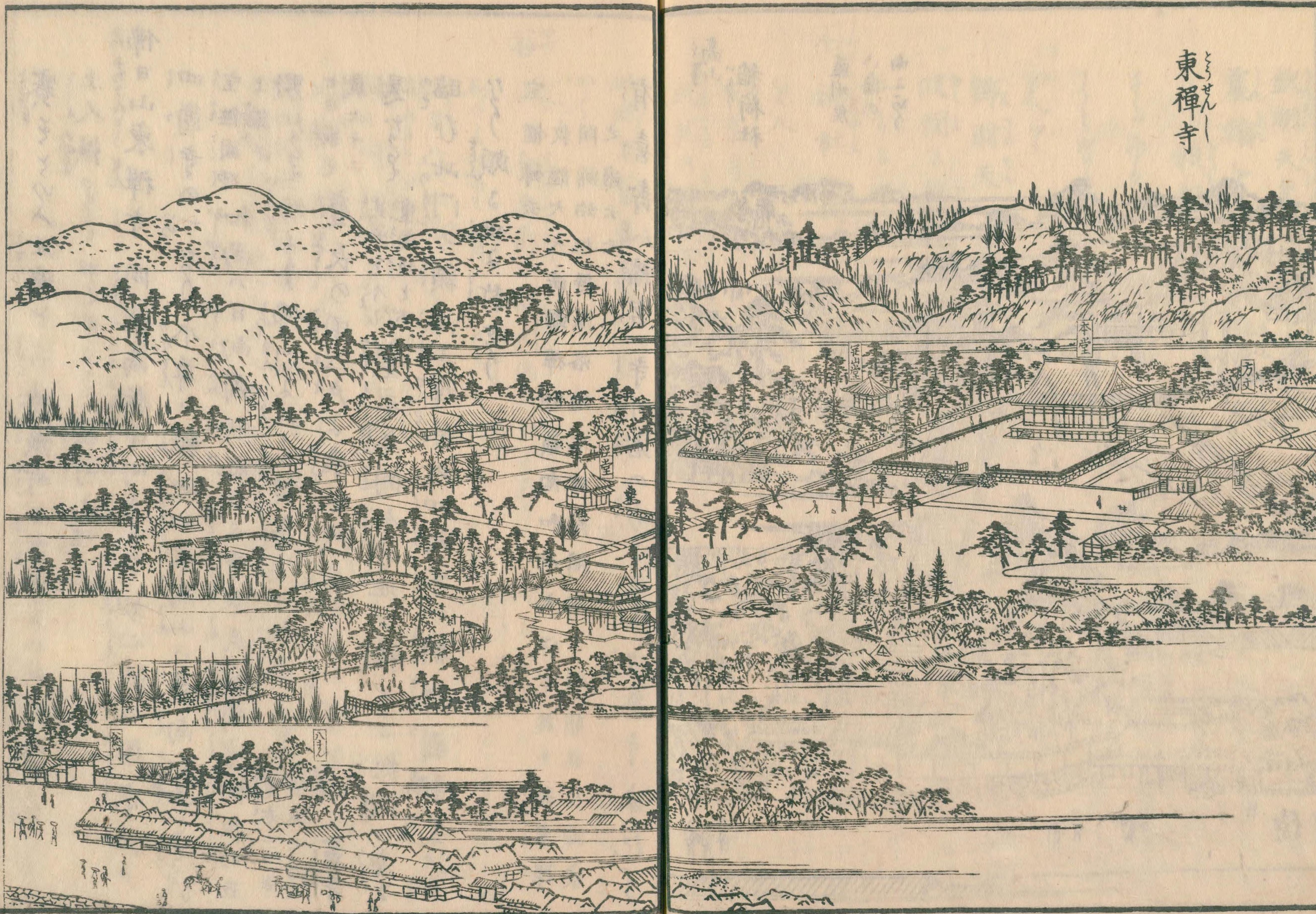
辨財天　慈覚大師江州竹生島に詣てまひし頃海中
波間に影現あるし宇賀神社形を摸擬し御長七寸
三分に彫刻なしまひしを當寺に安置しまゐるとなり

石神社　同所高輪南町鹿児島久留米両侯の間の小路
を入て西の方二丁斗にあるゆ祭神詳ならず同所天台宗
安泰寺の持なるゆ昔ハ遮軍神に作るとなり寄願ある者
成就の後ハ必何によらず樹木を携へ来る社地に栽て

高山稲荷社

薩州侯
江藩の
南にあり





国立国会図書館　　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

賽をといふ此地を石神横町と字するハ此社ある所なるを
土人誤まりて おもやをし横町と唱ふ

佛日山東禪寺 同所高輪中町にあり妙心派の禪宗江戸
四箇寺の一なり本尊ハ釋迦如来開山ハ嶺南和尚と号ス
宝鑑國師和尚ハ日向國飫肥の人守永氏肥前守祐良の五
と諡を
男なるを幼より佛門に入て後宗門の大徳なるを 寛永二十年癸未七月廿
七日寂を慶長の頃江戸に来る阿左布に一字を闢く當寺
歳六十二
是なるを 其地を今も靈南坂と云 寛永年間今の地に移さる総門ハ海に
臨む此門の額海上禪林の四大字ハ朝鮮國雪峯の筆
なり頗る世に称せり
宝鑑録云 敕諡大夫法鑑禪師嶺南和尚大心中興主盟東禪
開闢始祖得法洛西之地撥轉向上機關盛化海東
之邊云云
有喜壽八幡宮 寺外右の方にあり安泰寺奉祀す

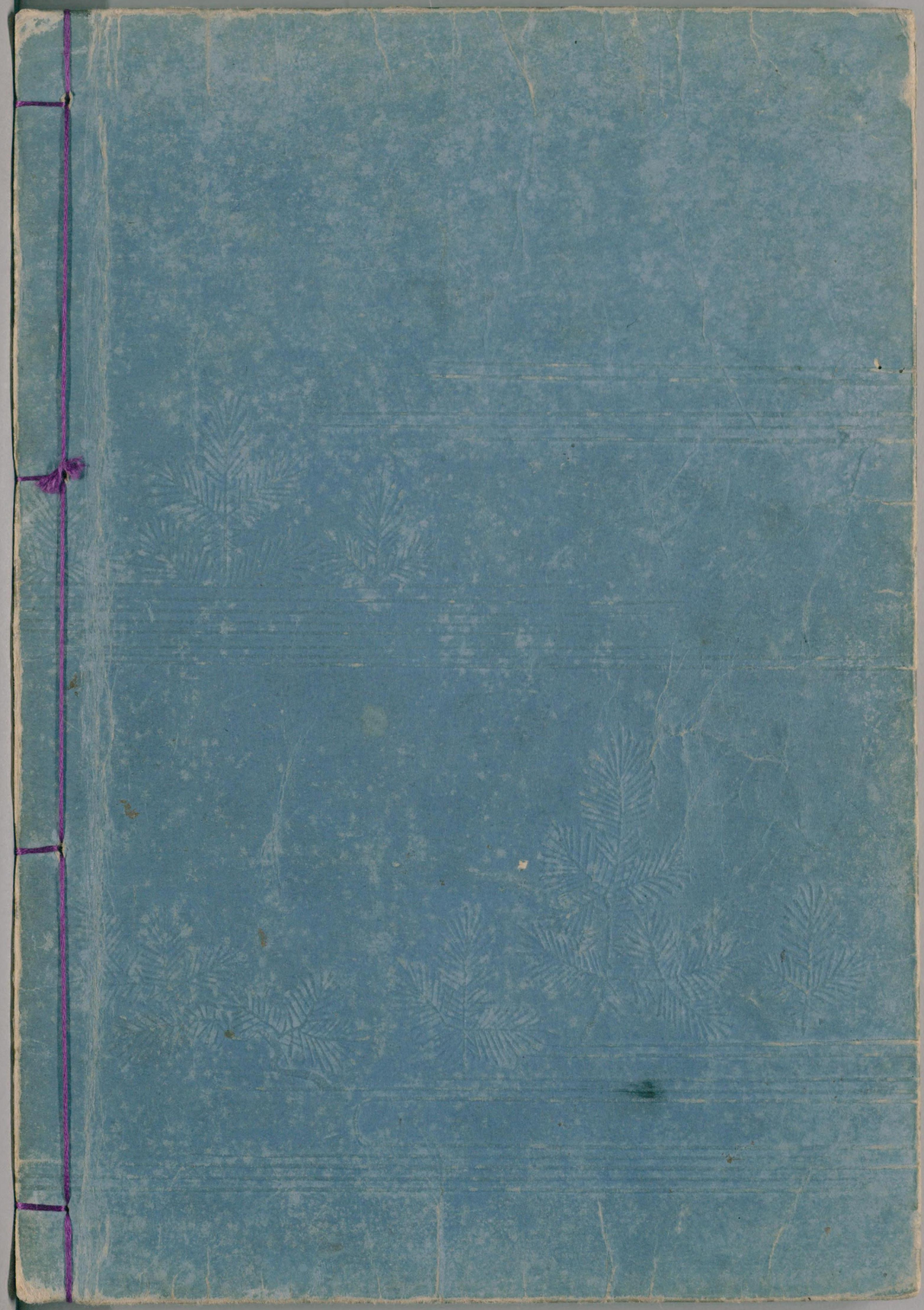
此地を有喜壽の森と号く 域人云古へ老樹の柊一株ありて鵜の塒あるしかハ鵜樹巣とも
かくといへり

谷山 今云所ハ品川の入口にありて海に臨む丘をさしてしかよへる昔ハ大日山と号るとも 紫の一本とせる草帋に昔此地に出崎ありしとも或ハ
諸侯八人の弟宅ありしなるにしかり 谷山ハ邑名にして目黒の南より
唱ふるといへども祇とするにたらず
袖が崎仙臺侯別荘の地の辺へかけて都て谷山村なるを
此地に限るを号にあらず 大日山とよびしハ昔此地に石像の大日如来立せるにしかり故なりとて
後世其堂宇破壊せし頃谷山稲荷の地にうつし又品川北馬場の光嚴
寺へ収むるといへと今ハ其石像の所在をしらず

839
20
57

江戸名所圖會天樞下終

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用



国立国会図書館　　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57

ガラス使用